

## 2 私を育てたあの時代、あの出会い

いつも一歩先行くあこがれの背中に「超」進学校が見えた  
福井県立武生東高校◎浅野裕治

## 4 特集

# 学力下位層の拡大に どう向き合うか

## 6 学校事例① 秋田県立横手高校

習熟度別授業と定期考査対策講座で学力全体を高める

## 9 学校事例② 群馬県立富岡高校

読解力を土台とした「黒門プロジェクト」で下位層を引き上げる

## 12 学校事例③ 広島県立広高校

各学力層に対応した指導で国公立大合格率50%を目指す

## 16 調査データから探る指導のヒント

自分で選んだ学問でも積極的に卒論に取り組むのは約5割

Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

## 17 指導変革の軌跡

## 18 茨城県立竜ヶ崎第一高校

指導の継承◎導入期指導を軸に3年間の指導ストーリー構築を目指す

## 22 宮城県・私立古川学園中学校・高校

進学指導◎「一流の高校生になれ」徹底的にかかわる指導で生徒の意欲を引き出す

## 26 宮崎県立高原高校

基礎学力の定着◎「基礎学力とは何か」の合意形成が生徒の学ぶ意欲を育てる

## 30 生きたデータの徹底活用

「2年生0学期」を見通した1年生2月までの学習習慣の定着

## 34 未来をつくる大学の研究室

鳥取という地の利を生かし  
「人の役に立つ」乾燥地研究に挑む

鳥取大 乾燥地研究センター 生物生産部門 恒川篤史研究室



## 38 30代教師の情熱

生徒と共に走りながら受験を肯定的にとらえる主体的な姿勢を育てたい

徳島県立鳴門高校◎喜枝秀行

## 40 VIEW'S REPORT

「高大接続テスト」は教育改革の突破口

## 48 VIEW'S SQUARE



母校の福井  
県立高志高校  
に異動になっ  
たのは、32歳

の時です。自分の高校時代を振り返ると、「勉強も部活動ももっと頑張れた」という思いがありました。後輩たちには、高校生活のすべてで存分に力を発揮してほしい。そんな気持ちで再び母校の門をくぐりました。

高志高校に赴任した私は、まず、生徒指導部に配属されました。そこで一番存在感を示していたのが長谷川重弘先生でした。私より8歳上の長谷川先生は、この県内屈指の進学校において、生徒はもちろんほかの教師からも既に一目置かれていました。それは野球部の監督らしい大きな声と威圧感のある風貌ゆえではなく、接する者へのこまやかな心配りと一歩先を見通した指導力によるものだと私に分かるまで、それほど時間はかかりませんでした。

長谷川先生は、私たち教師に「プラス思考でいきましょう」とよく呼び掛けました。模試の成績が芳しくなく、学年団が沈んだ雰囲気になりそうな時は、「最後に生徒が満足できる結果

## 私を育てた あの時代、あの出会い

今、振り返る教師としての原点

# いつも一歩先行く あこがれの背中に 「超」進学校が見えた

福井県立武生東高校 浅野裕治 ASANO HIROHARU

目指すべき自分像を見つけた時、

人は大きく成長するチャンスを得ることになる。

「手を伸ばせば届きそうなのに、やっぱり届かない」

そんな絶妙な場所を歩くあこがれの先輩との出会いにより、教師としての理想を明確にイメージしたという

福井県立武生東高校の浅野裕治先生が、母校での11年間を振り返る。

になればいいじゃないか」と顔を上げるように促しました。途中経過に一喜一憂しがちな私たちは、「まだまだこれから!」という先生の大きな声で大切なことに気が付きました。また、長谷川先生はいつも職員室で生徒と話し込んでいました。気持ちが高ぶった生徒にも悠然と対応する様子を、時に私たちはハ

ラハラしながら見守ったものです。優秀ではあっても子ども部分も残している生徒に、あくまで大人として真正面から向き合う姿がありました。教師としては当たり前のことだけれども決して簡単ではないことを自信を持って語り、実践する先生は、私にとってあこがれの教師像になりました。

だから、長谷川先生から「東京大に2年生を連れて行ってくれ」と言われた時も、二つ返事で引き受けました。時は90年代半ば。高校生の大学訪問がまだ珍しい時代に、教科指導プラスαで生徒の潜在能力を引き出すという、まさにこれか



## 先輩教師の言葉

### 一生懸命な姿は ほかの教師が 必ず見えています

福井県立丹生高校校長  
HASEGAWA SHIGEHIRO 長谷川重弘



浅野先生が、  
母校の後輩に  
対する熱い思  
いを持って赴

任してきたことは知っていました。事実、浅野先生はいつも生徒と一緒に汗をかいていました。例えば、高志高校は学校祭が盛大なのですが、その分、生徒会担当になった教師は大変です。多くの先生が1年やれば十分と思っているその役目を、浅野先生は「来年もぜひやりたい」と言っていました。労をいとわぬ向上心に感心したものです。

だから、東京大訪問でも私は浅野先生に声を掛けました。前例が少なく、大学にも高校にもノウハウが乏しい中、大学とのさまざまな交渉を根気強く続けてくれました。「生徒のためになる」という確信が、浅野先生にもあったんだと思います。

一緒にいた11年間のうち、特に進路指導部の仕事では、最も



らの生徒に必要な進路指導を長谷川先生は見抜いていました。赤門の前で「2年後ここに通えるといいね」と話した1人の生徒は、それまで学校でもあまり目立たなかった存在でしたが、大学訪問が刺激になったのか、見事現役で東京大に合格を果たしました。志を持っては夢はかなうことを私は生徒に教えられた気がしました。こういう感動に出合えるから、教師という仕事は辞められない。それを実感す



る機会を長谷川先生にいただきます。

もちろん叱られたこともあり。赴任3年目からは進路指導部に所属していたのですが、当時、進路指導部長だった長谷川先生に、12月の合否判定会議で準備した資料の不完全さを厳しく指摘されたのです。「今日は、進路指導部として不手際は許されない会議だ。そして何より、進路指導

部が扱うデータは生徒そのものなのだ」。休憩時間中に叱責されながら、「たぶんこれで大丈夫」と資料をまとめ上げた自分の詰めの甘さを後悔しました。生徒はこれから受験本番を迎えるというのに、こんなことでは……出鼻をくじかれた自分を恥じながら、長谷川先生の言葉を懸命に心に刻み込みました。

先生の姿でした。いつも目にするあの情景が、私の背中を強く押ししてくれたのです。そして、その後、さまざまな問題を抱えた生徒、保護者と向き合うようになった時、長谷川先生の相手を安心させる悠然とした態度、冷静に課題を検討し合える資料づくりを思い出しました。

高志高校が目指していたのは「超」進学校だったと、11年間の勤務を通じて私は理解しました。それは難関大の合格者数だけでなく、教科指導力、教養、生徒の心のケアなど、すべてにおいて教師がレベルアップを図り続ける高校です。そんな学校で「いま何をすべきか」を私は常に自問自答していました。そして、長谷川先生はさまざまなシーンで教師としての一歩先、目指すべき自分の姿を見せてくれました。私は、次々と気付きを促す触媒のような存在に巡り会えたのです。私はまた、母校に育てられました。

右 あさの・ひろはる 理科。大野高校を経て、高志高校へ。同校で11年間勤務。その後、武生東高校へ。現在、進路指導部長を務める。

左 はせがわ・しげひろ 数学科。丹生高校などを経て、高志高校で18年間勤務。その後、県教育庁高校教育課などを経て、現在、丹生高校校長。



多様な個性に対応できる力を身に付けるには、教師は常に勉強が必要です。浅野先生はそれができる人でした。私たちは生徒に、「一生懸命な姿は、誰かが見ている」と話します。それは教師も同じです。一生懸命な姿を同僚は見えています。私も、生徒のために懸命だった浅野先生をいつも見ていました。改まって言葉にはしなかったとしても、人間同士のつながりを信じている。だから、生徒も教師も頑張れるのだと思います。

※プロフィールは取材時(09年10月)のものです

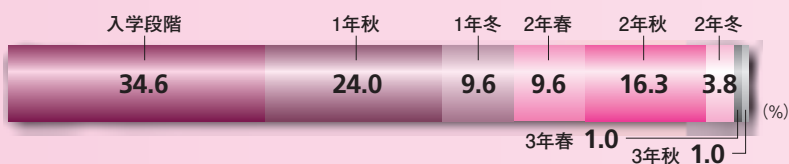
# 学力下位層の 拡大に どう向き合おうか

「入学生の学力が下に広がった」「学力下位層の生徒の数が増加した」という声を多く聞く。学校現場では、その課題にどのように取り組んでいるのだろうか。読者の声と実践事例を基に考える。

Q.貴校では以前よりも学力下位層の生徒が増えましたか？



Q.どの学年・時期に学力下位層が増えますか？



〔VIEW21〕高校版 読者モニターアンケート結果より  
調査時期○2009年9月 有効回答数○86人 ※数値は不明分を除く

学力下位層の生徒は以前よりも増え、しかも、「入学段階から増えている」と多くの教師が感じている。

# 1 学力下位層拡大に関する課題

## 『VIEW21』高校版 読者モニターの声より抜粋

◎生徒が、成績結果から安易に自分の可能性を低く見積もり、あきらめてしまう傾向がある。(兵庫県)

◎教師の授業進度が速すぎる。導入期教材の工夫が足りない。(長崎県)

◎大学入試の易化と、保護者の子どもの進路への関心の変化(ほどほどで良いという感覚)。(鹿児島県)

◎基礎学力のなさ(小中での読み書きの未定着)、自立心のなさ幼児性、忍耐力のなさ及びストレス耐性のなさ(教科指導へ入る前の工夫が必要になっている)。(三重県)

◎全県1区制で、本校の入試倍率が低下した影響が大きく、学びに対するモチベーションが上げられない(心にスイッチが入らない)。(新潟県)

◎少子化による生徒数の減少によって、以前なら入学してこなかった学力層の生徒たちが入学するようになった。(鹿児島県)

◎高1秋：中学時の貯金を使い果たし、高校入学時の意気込みが薄れる。高2秋：高い意識で学習習慣が定着した者とそうでない者との差が顕著になる。差が出るのは、やる気が向上する春より秋。(滋賀県)

# 2 学力下位層拡大を防ぐ実践

## 高校入試の入試倍率が低下し、入学生の学力下位層が増加

- ◎習熟度別による「講座制」の授業導入
- ◎定期考査対策講座で成績下位層を指名補習

・秋田県立横手高校 P.6

## 全県1区になり人気は低下。上位層が減少し、下位層が増加

- ◎読解力向上プログラムで学習の土台づくり
- ◎「黒門プロジェクト」で学力全体を引き上げる

・群馬県立富岡高校 P.9

## 授業の難易度が上がる2年生で、上位層と下位層の差が広がる

- ◎普段の授業で成績中位層への指導を強化
- ◎各学力層に応じた指導

・広島県立広高校 P.12

### 読者モニターの学校での実践

◎数学、英語での習熟度別授業、放課後の特別講習。ただし、習熟度別授業は学力層を固定化させている面もある。(千葉県)

◎こまめな声掛けによる「見られている感」を与える指導が最も効果が出やすい。目に見える目標を立てさせ、声を掛けて褒める。(宮城県)

◎ホームルーム・面談指導で目的意識の啓発、課題・小テスト・添削指導で基礎学力の強化、学年通信・学校だよりの充実で家庭との連携強化。(鹿児島県)

◎卒業生が書いた合格体験記を1年生から読ませ、「毎日の小テストが効果的」など日常的な学習の大切さを伝える。(富山県)

◎中学校までとは違う「学びへ向かう手掛かり」を与える必要がある。導入期だけでなく、学年の変わり目も一つの導入期と考えて指導する必要がある。(埼玉県)

◎授業の難易度は落とさず、課題をむやみに増やさず、学習習慣を付けるために課題を確実に提出させ、試験前後の放課後を使った個人指導に取り組む。(鹿児島県)

◎学校独自の校内検定試験を実施し、到達度評価を取り入れ、意欲向上を図る。(長崎県)

◎学力下位層へのきめ細かな補習。高学力層を浮きこぼさないためのプラス教材の提示。上位層や下位層に気を取られて、中位層への指導を怠らないこと。(滋賀県)

# 習熟度別授業と 定期考査対策講座で 学力全体を高める

秋田県立横手高校では、成績下位層の拡大に加え、成績上位層の薄さに対応するため、習熟度の要素を取り入れた「講座制」と成績下位層のための定期考査対策講座を行っている。

## 高校入試倍率はほぼ1倍 入学者の学力層が拡大

秋田県立横手高校は、旧制中学校を前身とする県内有数の伝統校だ。例年180人前後の国公立大合格者が輩出する進学校であり、2009年度入試では199人が現役で合格した。その同校においても、近年の新入生の学力低下は大きな課題だ。進路指導主事の鈴木和人先生は、「いわゆる『ゆとり教育』を受けてきた生徒が入学するようになってから、学力低下が顕著になったと感じ

ます。本県は小中学校の全国学力・学習状況調査で上位となっていますが、高校入学後に実施するスタディサポートからはそうした結果は読み取れません」と話す。

少子化の影響もある。秋田県の人口は秋田市内に集中し、その影響を受け、郡部の18歳人口は減っている。クラスを一つ減らしたものの、少子化の進行にクラス減が追いつかず、ここ5年間、同校の高校入試の倍率はほぼ1倍だ。

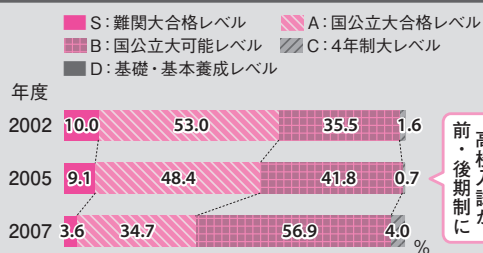
こうした影響もあり、高校入試の得点分布において、ここ数年、秋田

市内の進学校に差をつけられている。3学年主任の本田嘉之先生は次のように指摘する。

「09年度の高校入試で不合格だった受験生は、わずか十数人です。生徒たちなりの緊張感を持って受験に臨んでいるとは思いますが、かつてと比べるとかなり甘くなっているのは事実だと思います。その甘さから脱却できないまま高校生活を迎えると、成績がなかなか上がらないのです」

こうした問題に加え、高校入試制度の変更による影響もあるという。

高校入学段階での学力層別割合の推移  
(スタディサポートの結果より)



新課程スタート前の2002年度と比べると、ゆるやかに学力上位層が減少し、学力下位層が増加していることが分かる

### 秋田県立横手高校

◎秋田県第三尋常中学校が前身。「剛健質朴」を校訓とし、社会的・公民的資質の育成と理性・知性・感性の涵養を図る。文武両道をうたい、全校生徒の75%が部活動に加入。陸上競技部などが全国大会で活躍する。例年180人ほど国公立大合格者が輩出する。

設立 1898(明治31)年

形態 全日制・定時制/普通科・理数科/共学

生徒数 (1学年) 約275人

09年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、北海道大、岩手大、秋田大、東北大、東京大、新潟大、京都大などに計219人が合格。私立大には、青山学院大、慶應義塾大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ207人が合格。

住所 〒013-0008 秋田県横手市睦成字鶴谷地68

電話 0182-32-3020

WEB PAGE <http://www.yokote-h.akita-c.ed.jp/>

05年度から前期（学力検査なし）・一般・後期（同校では実施しない）による入試になった。約1割いる前期入試での合格者には、中学校での活動実績に優れているものの、学力に課題のある生徒もいる。合格者全



秋田県立横手高校  
鈴木和人 Suzuki Kazuhito  
教職歴24年。同校に赴任して7年目。進路指導主事。「大きな夢を持ち、かつ謙虚な生徒を育てたい」



秋田県立横手高校  
土田一人 Tsuchida Kazuo  
教職歴20年。同校に赴任して7年目。1学年主任。「最後まであきらめないでやり通す生徒を育てたい」



秋田県立横手高校  
加納勇 Kano Isamu  
教職歴22年。同校に赴任して4年目。2学年主任。「生徒一人ひとりの志望を実現できるように努力したい」



秋田県立横手高校  
本田嘉之 Honda Yoshiyuki  
教職歴19年。同校に赴任して5年目。3学年主任。「単に従順でなく、素直で正直な生徒であってほしい」



秋田県立横手高校  
小原真紀子 Obara Makiko  
教職歴27年。同校に赴任して7年目。前3学年主任。特活主任。「教育はパッション。受験は団体戦」

体では成績中下位層が厚く、上位層があまりいない状態も見られる。成績下位層の学力を引き上げ、学校のけん引役となる成績上位層をいかにつくり上げるかが、大きな課題となっている。

### 習熟度別授業で ライバル意識を持たせる

学力層の変化に対応するため、従来の授業を見直し、学力層に応じた指導に転換した。その一つが7年前に始めた「講座制」の見直しだ。2、3年生を対象に、特定科目について2〜3クラスを3〜4クラスに再編し、複数の講座から生徒が自由に選ぶシステムだ。対象科目は、国語は現代文、数学は数学Ⅱ、英語はライティング。学力の差が広がりやすい科目を選んだ。各科目とも進度や定期考査の内容は全クラス共通だ。2、3年次の年度当初に、講座ごとの授業内容を記した「指導・評価計画」(図)を生徒に示し、講座担当の教師が「アピール授業」を行う。

生徒は自分に合うと思った教師の授業を選ぶ。授業を前期の半年間受けた後、後期で再び希望を取る。

もともと、生徒の選択の幅を広げると共に、教師の指導力を向上させることも狙いとしていた「講座制」に、4年前から習熟度別授業の要素を取り入れた。4クラス展開なら、1クラスは成績上位層向け、残り3クラスは成績中下位層向け、3クラス展開なら1クラスは成績上位層、

2クラスは成績中下位層向けという具合である。2学年主任の加納勇先生はその意義を次のように述べる。

「1クラスが二十数人となるので、生徒一人ひとりに目が届くのが最大の利点です。予習・復習の状況や内容をどの程度理解しているのかを詳細に把握しやすいので、生徒の学力に合った指導ができるようになります。特に成績上位層に対しては、難易度の高い問題を取り入れたり、

#### 図 講座の指導・評価計画／2年生現代文(抜粋)

- ◎科目／現代文 ◎単位数／2単位
- ◎学年・組／2年1〜7組

##### ◎指導・評価計画

学期：前期 月：4月 指導計画：評論(一)、考える楽しみ  
評価計画：積極的に発言しているか、ノートをきちんと取っているか、文脈に即して読み取っているか、要約文を書けるか。

(以下省略)

##### ◎授業の概要 こういう授業です

評論力：現代社会やそこで生きる人間を取り巻く諸問題に注目した、最新の評論文を読解し、思考力・要約力・記述力を身に付ける。

(以下省略)

##### ◎授業の進め方

###### A 講座 応用力養成コース：

現代文の応用力を養成したい人のためのコースです。1年生の基本が身に付いている人、教科書以外の課題にも意欲的に取り組める人を求めます。

###### B-1 講座 実力養成コース：

現代文の基礎を固め、大学入試へ対応しうる力を養うコースです。

###### B-2 講座 実力養成コース：

現代文の基礎を固め、大学入試へ対応しうる力を養うコースです。

###### B-3 講座 実力養成コース：

現代文の基礎を固め、大学入試へ対応しうる力を養うコースです。

##### ◎留意事項 授業に取り組む上でのアドバイスなど

予習として：本文を通読し、その際、重要と思われるポイントに傍線を引くなどして、本文を「加工」する。また、本文末の「学習」「表現の学習」「言葉の学習」について解答を作成する。

授業：予習がなされていることを前提として実施します。教材ごとに要約や感想など、文章表現力を付ける訓練も積みます。

※学校資料を基に編集部で作成

国公立大の個別学力試験の問題を解かせたりして、知的好奇心を喚起するように心掛けています」

習熟度別授業によって成績上位層と成績中下位層のクラスが分かれるため、中下位層の生徒には上位層に勝ちたいという意識が働く。逆に、上位層の生徒には中下位層の生徒には負けられないという意識が芽生え、良い意味で切磋琢磨する雰囲気生まれるという。

教師にとっても、生徒に選ばれることで意欲を刺激される上、半期に一度、希望を取り直すため、生徒を更に引き付ける授業をしようという意識が強くなる。生徒・教師双方に緊張感が生まれ、意欲向上にも結び付いている様子が見える。

### 定期考査前に 成績下位層を指名補習

成績下位層の拡大を防ぐために、補習講座「定期考査対策講座」を取り入れた。前回の定期考査で結果の悪かった生徒を指名し、講座に参加させる。国・数・英が対象だが、場合によって理科が加わる。定期考査

前の約3週間、放課後の1時間を使い、毎日いずれかの教科の補習に取り組む。部活動加入者については、前回に一定水準に満たなかった生徒は、特別な事情がない限り必ず出席させるよう、学年部と部活顧問との間で共通理解がなされている。

「受講者は、09年度の2学年の場合、英語約30人、数学約60人、国語と理科は各十数人。1学年は、2回目の定期考査で延べ230人を超えました。人数が多くて驚きました。定期考査の難易度を下げたりはしません。『本校に来たら、このレベルの内容は理解して欲しい』という学校のメッセージでもあるからです。ただ、その生徒には、しっかりフォローする必要性を感じています。中学時代のような宿題をこなすだけの勉強方法では対応できません」  
(1学年主任・土田一人先生)

### 初期指導と生徒面談を徹底し 1年生で学習習慣を定着

定期考査で結果の悪い生徒を減らすため、今後は、初期指導の徹底を

図っていく方針だ。成績下位層の底上げ策として初期指導に力を入れた06年度入学生が、09年度の大学入試で国公立大に199人合格。そのうち東京大に4人、東北大には合格者が初めて30人を超えたことも、初期指導の徹底を決めた大きな要因だ。

06年度の1学年は入学当初、スタディサポート、進研模試共に過去最低の成績だった。そこで、4〜6月は、生徒を「中学生から高校生にする」ことを最優先課題とした。生活指導では、服装や頭髪などの整容指導、遅刻指導を徹底。加えて、週末課題等は100パーセント提出するように厳しく指導した。教科によっては「一人勉強ノート」をつくり、一人ひとりの自学状況を確認するなど、自学自習の習慣付けを図った。

生徒一人ひとりと徹底的にコミュニケーションを図ったのも、大きな特徴だ。1年次から面談を頻繁に行い、定期考査や校外模試の結果が悪い生徒は、担任による面談に加え、教科担当の面談も行った。教師が生徒把握を綿密に行うと共に、生徒には自分の弱点を自覚させ、克服法をアドバイスして、学習の仕方を改善

させた。06年度入学生の学年で学年主任を3年間務めた小原真紀子先生は、次のように振り返る。

「夏までは生活指導を徹底的に行いました。初めて手応えを感じたのは、夏休みの勉強合宿の時です。朝から晩まで自学自習に取り組みましたが、集中力が途切れずに学習する生徒を見て、これは行けるのではないかと思いました。予想通り、11月模試で例年通りの学力まで上がりました。導入期に生活習慣を徹底的に整えさせること、学習習慣を身に付けさせることが、その後の学力伸張に不可欠であると実感しました」

現状では成果の出た取り組みが他学年に波及していかないことが悩みでもあると、鈴木先生は指摘する。「本校は伝統的に学年色が濃く、進学実績も年度によってばらつきがあります。今後は、06年度入学生のように実績を上げた学年の取り組みを他学年でも行い、学校全体の共通理解にしたいと考えています。今は、週1回、進路指導部と各学年主任とで部会を開き、情報交換をしています。成功事例を共有し、次年度以降につなげたいと思います」



群馬県立富岡高校

# 読解力を土台とした「黒門プロジェクト」で下位層を引き上げる

高校入試で全県一区の導入、私立校の台頭等で、学力下位層が拡大傾向という群馬県立富岡高校。「なりたいたい自分」を描く進路学習と同時に、全教科の土台となる読解力を養成し、生徒の意欲向上を目指す。

## 全県一区の影響で学力層が低下傾向に

群馬県富岡市は県南西部に位置する、人口約5万人の都市だ。群馬県立富岡高校は同市を代表する進学校で、2009年度大学入試では76人が国公立大に現役で合格した。群馬県では07年度高校入試から、県立高校の通学区域が全県一区となり、高崎市や前橋市、太田市などの進学校に生徒が集中するようになった。

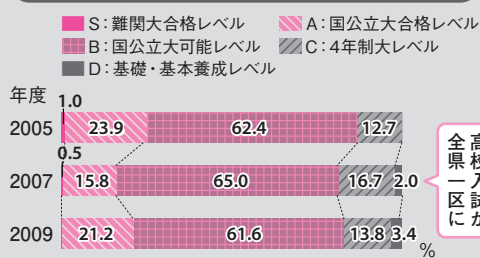
た。私立校も特進クラスの設置、授業料減免制度の充実などで志願者を集め、実績を伸ばしている。全県的に18歳人口の減少が進み、周辺地域の県立高校では学力下位層の増加が課題となっている。

こうした背景から、同校でもここ数年、入学者の成績下位層がやや増加傾向にあるという。進路指導主事の高橋康先生は次のように話す。「スタディサポートでも、1年入学段階の成績下位層が増え、上位層

が減っています。成績上位層の知的好奇心を満足させながら、成績下位層の引き上げを図る手立てが必要だと痛感しています」

成績下位層が増えても、授業の難易度を下げたりはしない。授業で同じ内容を4回、5回と繰り返し、ノートを頻繁に回収し添削して返すなど、手間を惜しまずにきめ細かい指導を心掛ける。各学年の朝補習や夏休みなどに行う選択制の課外講座は、科目ごとに

高校入学段階での学力層別割合の推移 (スタディサポートの結果より)



2007年度入学生がそれ以前の入学生と比べて学力上位層が減り、学力下位層が増えていることが分かる。

### 群馬県立富岡高校

◎群馬県尋常中学校甘楽分校を前身とする。「質実剛健・文武両道・自主自立」を校訓として、人格の陶冶とリーダーシップの涵養を目指す。「黒門プロジェクト」に基づく進路指導・学習支援により国公立大合格者が着実に輩出している。

設立 1897(明治30)年

形態 全日制・定時制/普通科/男子

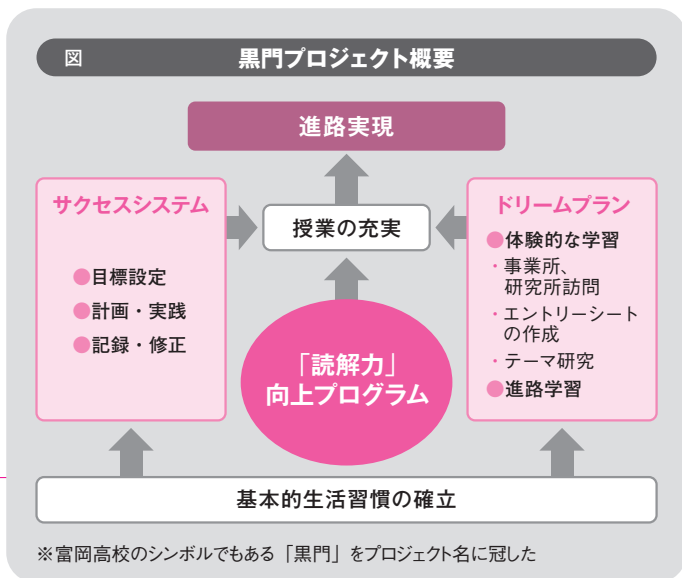
生徒数 (1学年) 約200人

09年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、東北大、筑波大、群馬大、東京大、高崎経済大などに計80人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、中央大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ335人が合格。

住所 〒370-2343 群馬県富岡市七日市1425-1

電話 0274-63-0053

WEB PAGE <http://www.gsn.ed.jp/gakko/kou/tomioka/>



「基礎」「標準」の習熟度別とし、生徒が選択しやすいよう講座の狙いや対象とする学力層を明示した。

「**なりたい自分と今すべきこと**」を「**黒門プロジェクト**」で**自覚させる**

きめ細かい指導で学力層の拡大に対応してきた同校だが、生徒の学力も意識も下がり続ける中で、授業や補習だけで生徒を引っ張っていくことに限界を感じ始めていた。そこ

で、大胆に発想を変え、体系的な進路学習を通して生徒の意識面の変革を促す指導への転換を図った。それが、05年度入学生から始めた「黒門プロジェクト」(図)だ。「こんなことを学びたい」「こんな職業に就きたい」という「なりたい自分(Want)」を想像させ、「今、しなければならぬこと(Must)」に気付けさせるプログラムだ。

取り組みの柱は「サクセスシステム」と「ドリームプラン」だ。「サクセスシステム」は、夢の実現に向けて日々の学習計画を立て、達成度を振り返り、反省・修正していく学習支援システムだ。手順は、①ドリームシートに自分の興味・関心のある事柄や、将来の夢、なりたい職業などを記入、②日々の学習計画や部活動など1日の計画を立案、③毎日の生活や学習時間を記録・点検、④校内実力テストや定期考査の結果を記入・分析し学習状況を直す、というもの。「ドリームプラン」は、

教科の壁を取り払い、興味・関心に応じて総合的・体験的に学問を深めることで夢を育むプログラムだ。1年生は現代社会の課題について学び、社会貢献の側面から職業を考える。2年生は自己の興味・関心を具体化させ、「テーマ研究」として追究すると同時に、実現に必要な学問や大学について調べる。並行して、大学見学や大学の模擬講義を行い、大学や学問のイメージを具体化していく。

### 夢や志望を考えさせ、生徒の学習態度を変える

「サクセスシステム」と「ドリームプラン」は、自転車の両輪の関係にある。夢や希望が後輪(ドリームプラン)となつて、前輪(サクセスシステム)である日常の生活や学習習慣を力強く前進させる。高橋先生は次のような期待を寄せる。

「将来の目標がなかなか持てない中で、Mustである学習に取り組んでも、望ましい効果は期待できません。『ドリームプラン』によって具体化した夢や志望が、日常的な

生活や学習を点検・改善させるための動機付けとなり、自律的な学習態度や、厳しい受験を乗り越える精神力が身に付くと考えています」

学習習慣の定着は、生徒の自律的な改善だけに委ねるわけではない。「サクセスシステム」で得た学習時間や生活態度のデータは面談の材料とし、全体的に改善すべき問題が見られたら、学年集会やLHRなどの機会に繰り返し改善を呼び掛ける。

「黒門プロジェクト」1期生で、国公立大合格者が過去最高の83人を記録した07年度3年生は、前輪と後輪がうまくかみ合った学年だった。同学年担任を務めた清水義博先生は、次のように当時を振り返る。

「その学年が2年生の時のことです。テーマ研究や大学模擬講義を終え、11月の模試を迎えたころ、生徒が『過去問に取り組みたい』と言ってきました。その中には成績上位者だけでなく、中下位の生徒もいました。過去に生徒自らが言い出したことはなかったので驚きました。生徒の中でWantとMustがつながり、自律的な学習意欲が芽生えたことを強く感じた瞬間でした」

いつもは閑散としていた200人収容の自習室に、生徒の姿が多く見られるようになったのは、その頃からだった。テーマ研究で釣り糸の研究に取り組んだ生徒は、それをきっかけに繊維学部へ進んだ。その生徒は釣り好きで、必ずしも成績は良く



群馬県立富岡高校教頭  
**塚越 究** Takagooshi Kiyomasa  
教職歴25年。同校に赴任して1年目。「無茶だけど無理じゃない」



群馬県立富岡高校  
**高橋 康** Takahashi Yasushi  
教職歴21年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。「生徒には『歩前へ出る勇気』を身に付けてほしい」



群馬県立富岡高校  
**八木原 賢** Yajihara Masaru  
教職歴27年。同校に赴任して7年目。1学年主任。「夢を見ることの大切さを生徒に語り掛けていきたい」



群馬県立富岡高校  
**狩野直樹** Kanou Naoki  
教職歴17年。同校に赴任して4年目。進路指導部。「努力こそただ一つの道であることを生徒に伝えたい」



群馬県立富岡高校  
**清水義博** Shimizu Yoshitomo  
教職歴13年。同校赴任歴8年目。進路指導部。「生徒に最後まであきらめない意志の強さを持つて欲しい」

なかったが、プロジェクトをきっかけに夢を見つけ、それを学習意欲につなげることができたのだ。

### 読解力向上プログラムで1年次に学習の土台をつくる

プロジェクトを通して、どの学力層でも意欲を高める機会をつくることのできるようになった。しかし、読解力の不足は生徒の学力に深刻な影響を及ぼしている。物理担当の狩野直樹先生は、次のように述べる。

「物理の問題には、しばしば『ある物体が〜』という文言が出てきます。そうした抽象的な表現に対する生徒の想像力が低下していると強く感じています。授業で説明する際は具体的な話に置き換え、それを再度抽象化して説明するという作業を繰り返しているのが現状です。抽象的な言葉を、具体的にイメージするための訓練が必要であると感じます」

同校は、将来の目標を明確に描くためには、論理的に考え、表現するための読解力が土台として不可欠だ

と考え、1年次に「読解力向上プログラム」を行い、「ドリームプラン」と「サクセスシステム」を学力向上面で支えている。1学年主任の八木原賢先生はその意義を次のように話す。

「夢を描き、それに基づいた学習計画を立てられたとしても、表現力や思考力がなければ学習成果は期待できません。生徒は読書量が少なく、成績上位層でも薄い書籍しか手にせず、複雑な評論に挑もうという生徒はほとんどいません。論理的な思考を支える読解力を育てていくことが、夢を描く視点を広げることにもなり、夢と日常の学習を結び付けることにもなるのです。ですから、あらゆる学力の基礎になる読解力を伸ばし、『黒門プロジェクト』全体の効果をより高めることが、読解力向上プログラムの狙いなのです」

「読解力向上プログラム」の核は、週1回の読解力トレーニングだ。新聞の社説やコラムなどの短い文章を読ませ、要点に線を引かせる。年6回の「要約の時間」では、3学年担

任以外のすべての教師が添削に当たる。全校態勢で生徒の基礎学力を高めていこうとする意識を教師間で共有している点は、同校の強みだ。

即効性はあまりないが、効果は2年生以降にじわりと表れてくるという。数学の文章題が苦手だった生徒が、トレーニングを1年間続けたところ、2年生以降の難しい問題にも抵抗なく取り組めるようになった。その効果は生徒自身も実感しており、1年生の終わりにアンケートを取ったところ、「読解力向上プログラム」の肯定率は8割を超えた。

今後の課題は、「黒門プロジェクト」においても、学力層別に綿密な指導を心掛けていくことだ。塚越研究教頭は次のように述べる。

「『黒門プロジェクト』では、学力層を問わず、意欲を高められるようになってきました。今後、学力層別の指導の型が出来れば、更に効果的にWantとMustを結び付けられるでしょう。実績を一つひとつ確実に積み重ね、取り組みを更に向上させたいと思います」

# 各学力層に対応した 指導で国公立大 合格率50%を目指す

広島県立広高校の課題は、2年生以降の学力層の拡大だ。成績中位層を中心に据え、上位層には個別添削、下位層には指名補習を行う。面談や進路検讨会などを通して、下位層となるのを食い止め、上位層への引き上げを図る。

## 2年生での学力層の拡大と 下位層の固定化

広島県立広高校は、県南西部に位置する呉市を代表する進学校だ。1942年開校の呉第三中学校を母体とし、呉三津田高校（旧呉一中）、呉宮原高校（旧呉二中）と共に「呉三高」と呼ばれている。

学力層の拡大は、そうした同校にとっても大きな課題だ。特に、年次進行に伴い、学力層が拡大していくことが、問題となっている。1年生の7月模試までは成績上位層と下位

層の間に大きな開きはないものの、2年生になり教科の内容が難しくなるにつれて、学力差が広がっていく。その傾向が顕著なのは、数学だ。教務主任の酒井義彦先生は、次のように話す。

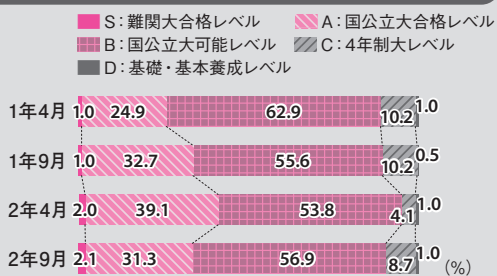
「1年生では知識と理解だけでも何とか授業についてこられるのですが、2年生になり、論理的思考力や数学的な考え方などが求められるようになってくると、途端に挫折する生徒が増えます。そして、一度、成績下位層に定着してしまうと『どうせ勉強しても出来ない』という思いにとら

われ、はい上がることが難しくなるのです」

同校は「文武両道」を校是とし、部活動加入率は9割を超える。部活動に力を入れたいため、同校を選ぶ生徒も多く、部活動と勉強との両立がおろそかになるケースもある。

「本校への入学がゴール」という意識の生徒も多いのが現状です。1年生では教科の内容はそれほど難しくないので、『高校の勉強はこんなものか』と思うのかもしれませんが、高校での勉強を甘く見させないよう、導入期に我々教師が働き掛けて

2009年度3年生の1、2年次の学力層別割合の推移  
(スタディサポートの結果より)



1年4月から2年4月にかけて学力が全体的に上昇するが、2年の9月には学力下位層が増加する

### 広島県立広高校

◎「敬虔・自律・友愛」を校訓として、「旧き良き教育」を目指す。「文武両道」を校是としており、生徒の9割が部活動に加入。2003年度から広島県の「進学指導重点校」、09年度には「チャレンジハイスクール」に指定されている。

設立 1942(昭和17)年

形態 全日制・定時制/普通科/共学

生徒数 (1学年) 約200人

09年度入試合格実績(現浪計) 国公立大は、京都大2人、大阪大3人、岡山大2人、広島大21人、九州大1人など計85人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ281人が合格。

住所 〒737-0141 広島県呉市広大新開3-6-44

電話 0823-72-6211

WEB PAGE <http://www.hiro-h.hiroshima-c.ed.jp/>

いくことが重要だと考えています」と、酒井先生は述べる。

## 普段の教育活動でこそ 成績中位層の指導を強化

同校の指導で特筆すべき点は、学力層の拡大が課題という中でも、まず、生徒の大多数を占める成績中位層に目を向け、「授業第一主義」を徹底していることだ。同校が最大の課題とするのは、偏差値40台後半の生徒を、いかに50台に引き上げるかだと、進路指導主事の堤隆一郎先生は話す。

「本校の目標は、文武両道を目指しながら、国立大合格率50%を達



広島県立広高校  
酒井義彦 Sakai Yoshiko  
教職歴25年。同校に赴任して6年目。教務主任。「学問に王道なし」の精神を生徒に伝えていきたい。



広島県立広高校  
堤隆一郎 Tsutsumi Kyuchiro  
教職歴32年。同校に赴任して2年目。進路指導主事。モットーは「理想は高く、姿勢は低く」

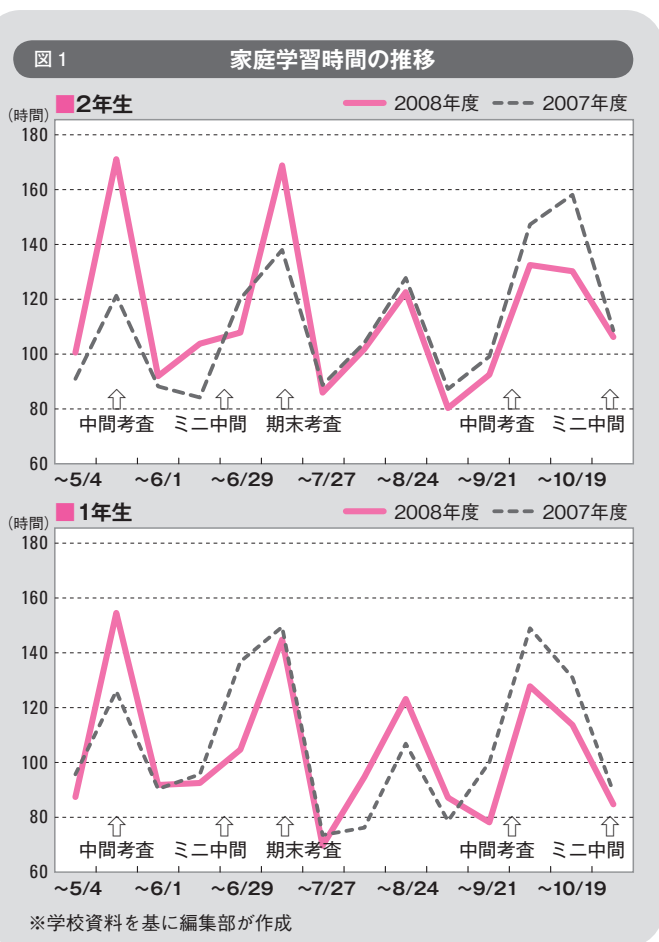
成することにあります。そのためには、人数の多い成績中位層の指導を最も重視する必要があります。上位層と下位層の指導だけに力を入れていたのでは、目標は達成できません。本校には、実力はありながら本気で勉強に取り組まないために、偏差値40台でとどまっている生徒が多くいます。そうした生徒を、いかに偏差値50〜55に引き上げるかが、目標達成の上で大きなポイントだと考えています」

進研模試の偏差値データを見ると、1年次の7月模試は平均55前後であるが、3年次の7月には50にとどまるのが常であるという。

生徒数の多い成績中位層を伸ばすためには、普段の授業における指導の工夫が重要になる。家庭学習の習慣付けにも力を入れ、特に数学と英語は、学習時間が大きく影響すると考え、1年生から3年間、毎日、他教科も含めた学習記録を付けさせる。1週間ごとにデータを出し、学習時間が少ない生徒、学習内容に偏りがある生徒には、面談をして修正

を促す。

学習習慣付けのために、模試も活用する。その一つは、前回の模試で判明した弱点分野について試験を行う「ミニ中間」だ。模試に対する意識付けと弱点分野の克服が目的だが、中間考査と期末考査の間の学習時間が最も少なくなる時期(図1)に試験を課し、学習時間を増やしたいという意図もある。



「生徒の学習時間は、例年、定期考査の直前に跳ね上がるものの、考査後はその反動で大きく下がる傾向にあります。ここを下げずに家庭学習を続けさせることで、中下位層が増えるのを防ぎたいと考えています」(酒井先生)

成績中位層の中でも下の方の層については、下位層とされないように「教科別面談」を実施。特に成績

が悪かった教科について、理由は何かを教科担任と話し合い、今後の方策を考える場を設けている。苦手科目だからと質問しにくかったという生徒でも、教科担任とじかに面談することによって、その後の関係づくりにもつながるといふメリットもある。

## 指名補習により下位層の学力と意識の向上を図る

図2で示したように、同校は徹底した学力層別指導により、学力層の拡大に対応している。堤先生は、「成績上位層は育てる」「成績下位層はこぼさない」というのが、本校の基本です」と、指導方針を端的に述べる。

成績下位層を下支えするための取り組みの一つは、「基礎力養成講座」だ。年4回の定期考査において、1、2年生の成績下位層を指名して行う補習で、国語、数学、英語で各20人程度が対象となる。

以前は、各学年とも成績にかかわらず、希望者による補習を行っていたが、学力層の違いにきちんと対応

した指導をするために、3年前に指名制に変更した。部活動に忙しい生徒でも半ば強制的に参加させることにより、部活動のある生徒でも補習に集中できるようになったという。

指名する生徒は、当初、模試の成績で決めていたが、今は定期考査の結果で選ぶ。指名される生徒を固定化しないためだ。

「成績下位層の生徒に必要なのは、やればできるといふ自信と上を目指そうとする意欲です。模試の結果では生徒が固定しやすく、それでは挫折感が増すだけです。定期考査にすれば、下位層から抜け出せる機会をより多く与えることができます」（酒井先生）

## 上位層向けの添削指導でトップ集団の形成を目指す

成績上位層に対しては、「ハルプラン」という個別添削を行う。対象は1、2年生で、模試の結果により、国語、数学、英語各20人程度を各教科が推薦する。推薦された生徒は教科主任と面談し、強化すべき分野について話し合い、生徒それぞれに適

した課題を与えられる。上位層の中でも更にトップ層をつくり、難関大の合格実績を伸ばすと共に、中位層以下の生徒のけん引役となってもらうことが狙いだ。

課題の提出は、2週間ごと。成績上位層には部活動での主力選手が多いため、課題に取り組む時間が限られている生徒もいる。時間的なゆとりを持たせるため、昼休みでも放課後でも、期間内であれば自由に添削指導を受けられるようにした。

ただ、個別添削である以上、生徒が自ら課題を解いてこなければ、指導は成立しない。部活動などに力を入れ、課題提出がおろそかになってしまふ生徒もいる。今後は、教科ごとに時間を決めたり、一斉に生徒を集めて指導を行うなどの工夫をこらし、推薦された生徒全員の指導がより充実したものになるようにしたいという。

## 1、2年次の進路検討会で学力層別の対策を検討

学力層の拡大を防ぐには、学年団が常に生徒の状態を把握することも

重要になる。学年団で学力層ごとの課題を共有し、そのための解決策を考える取り組みが、1、2年次の進路検討会だ。

生徒一人ひとりについて、志望大の合格可能性を検討し出願校を絞り込むという、通常の進路検討会を行うのは3年次のみ。1、2年次では、年5回、クラスごとに進研模試の成績上位者・下位者各10人と、前回の模試から大きく成績が下がった生徒について、現在の学習状況や志望などの状況を学年団で共有する。

成績下位者については、固定化させず、中位に引き上げていくことが課題となる。家庭学習時間を見ながら、「なぜ成績が上がらないのか」「どのような志望を持っているのか」「志望が決まっていないから、下位に甘んじているのか」「意識を高めるにはどのような志望を持たせたらいいか」など、本人の志望や適性、家庭学習時間などを総合的に見ながら学力量向上の方策を練る。

成績上位の生徒については、旧帝大を狙える生徒を発掘し、トップ集団を形成することも狙いだ。生徒一人ひとりに適した志望を実現するた

めの方策を徹底的に探っていく。

「生徒の中には、たとえ旧帝大を狙える力があっても、『地元の国公立大で十分』という意識を強く持つ者もいます。生徒の意識をより高めていくための継続的な働き掛けが必要です。そのため、1、2年次にも進路検討会を行い、学年団で生徒の情報共有しておくことには、大きな意義があるのです」と、両先生とも強調する。

### 「教科主任会」を 授業時間内に組み込む

成績中位層の学力向上を図る上で重要なのは「授業第一主義」の徹底だという考えの下、08年度から教科主任の役割を明確にした。

「本校では、教科主任の役割があまり機能していませんでした。しかし、担当教科ではどのような方針で指導にあたるのか、授業力をどのように高めていくのかなど、教科主任がリーダーシップを発揮すべき場面はたくさんあります」（酒井先生）

まず、週1回、教務主任と各教科の主任が集まる「教科主任会」を授業時間内に組み入れて定例化させ、教科間の連携やノウハウの共有を図るようにした。放課後などに行うと、参加できない場合が起こりやすいため、教科主任が確実に集まれるような時間帯に設定し、取り組みに対する意識を高められるようにした。

更に、教科主任が、教科内で各教師と個別に面談を行うようにした。授業について指導・助言できる機会を意図的に設ければ、指導の方向性や教科経営についての共通理解も得られる。また、成績下位層の生徒に対しては、教科主任が必要に応じて個別に面談する。教科主任にとって担当外の生徒の状況を把握でき、生徒にとっては教科主任との面談によって刺激が得られる。

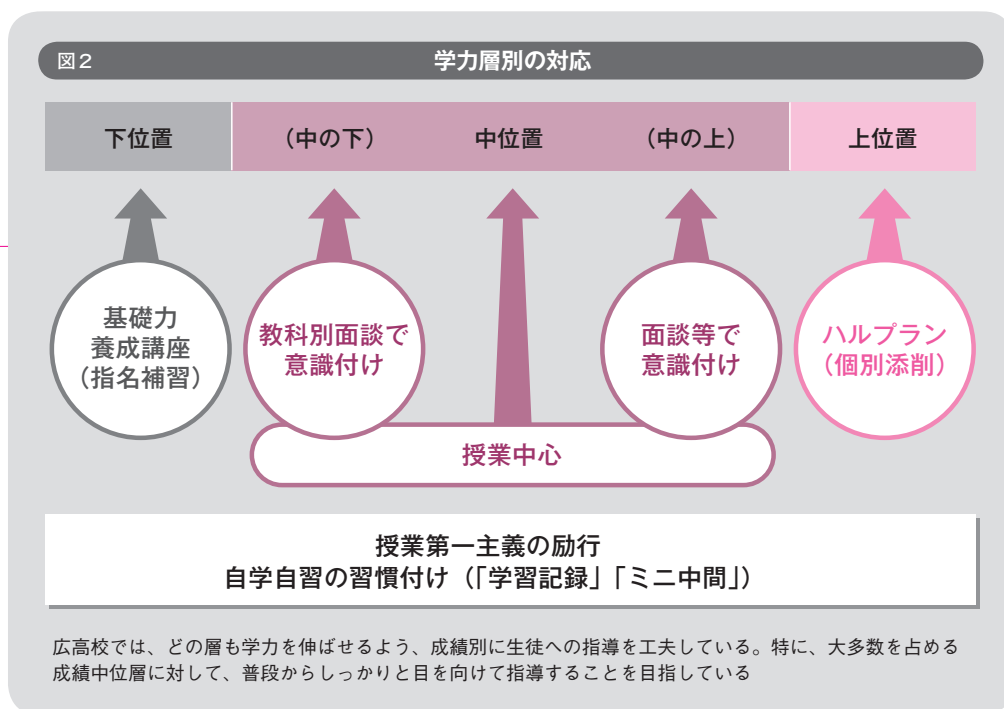
「高校教育の土台は、教科指導です。教科主任こそが中心となって各教科を主導していく意義は大きいと思います。特に新学習指導要領では、より教科横断的な指導が求めら

れます。他教科のノウハウを取り入れたり、情報を共有したりする必要性は、格段に高まるでしょう。教科主任会をいかに生かしていくかが、今後の授業改善の鍵になると考えています」（酒井先生）

「学力層の幅が広いのは、地方の公立高校の宿命です。あらゆる学力層に対応した指導ができれば、本校の存立意義は高い」と、堤先生は言い切る。

今後は授業第一主義の徹底を図りながら、取り組みの成果をデー

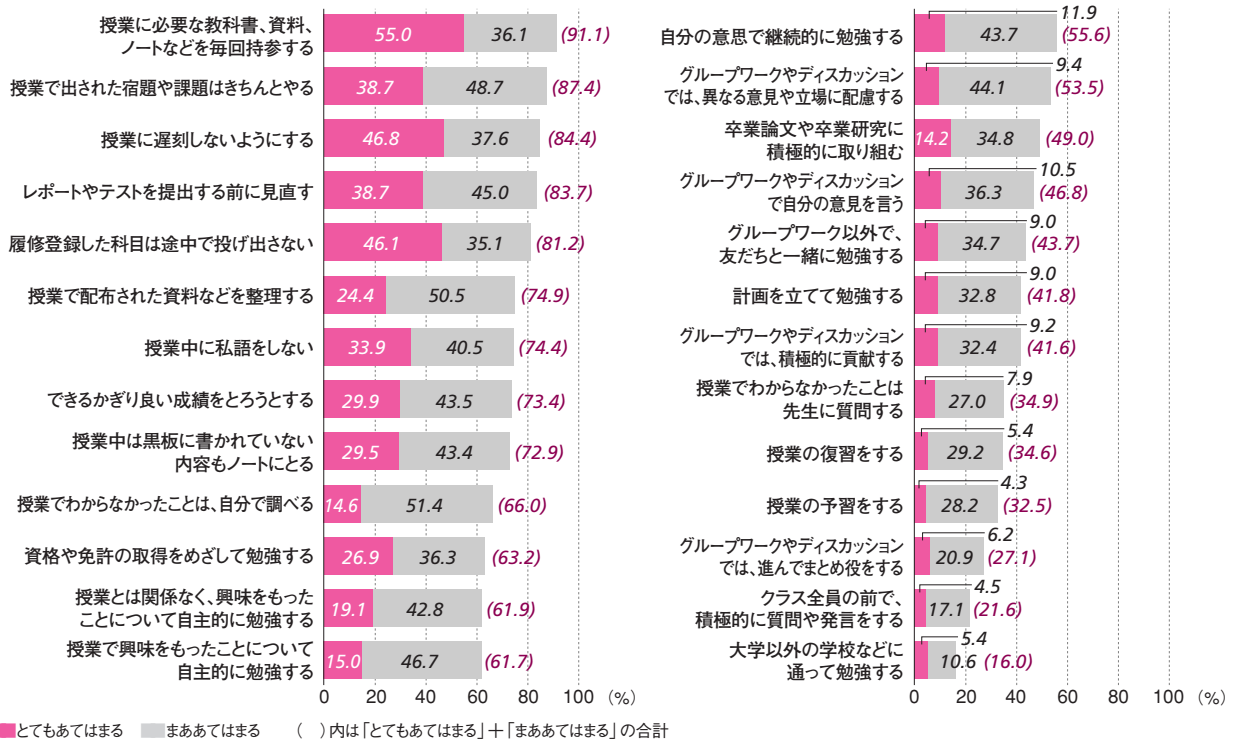
タに基づいて検証し、指導改善に生かしていくという。



# 自分で選んだ学問でも 積極的に卒論に取り組むのは約5割

Benesse教育研究開発センター「大学生の学習・生活実態調査報告書」より

図 大学での授業への取り組み



出典○「大学生の学習・生活実態調査報告書」／調査時期○2008年10月／調査方法○インターネット調査／調査対象○18～24歳の大学1～4年生(ただし、留学生、社会人経験者を除く)／有効回答数○4,070人

## 大学で予習・復習をするのは約3割

高校では生徒に主体的な学習姿勢を身に付けさせる指導に力を入れているが、大学生はどのような状況なのか。図は、大学生に授業への取り組みについて尋ねた結果だ。

『授業に必要な教科書、資料、ノートなどを毎回持参する』『授業に遅刻しないようにする』など、授業への基本的な姿勢に関する項目は上位にあり、多くの学生が授業をまじめに受けているようだ。ところが、『授業でわからなかったことは、自分で調べる』『授業とは関係なく、興味をもったことについて自主的に勉強する』など、授業外で自主的に勉強する項目にあてはまると答えたのは6割台。高校では予習・復習指導をしている学校が多い状況の中で、大学で予習・復習をする学生は3割程度にとどまった。これらの結果から見ると、まじめに学習する学生は多いが、積極的に自主的な学習までする学生は少ないようだ。

## 大学生になっても受け身的な学習態度

高校現場からは『卒業論文や卒業研究に積極的に取り組む』が5割にも満たないという状況に疑問の声があった。「卒業論文や卒業研究は、大学で学んだ証しである。自分で勉強したいと思って選んだ学問にもかかわらず、積極的に取り組めない状況は問題に感じる」という指摘だ。

同様に、大学生になっても受け身的な学習姿勢であることを問題視する声もある。それは、『クラス全員の前で、積極的に質問や発言をする』が約2割、『授業でわからなかったことを先生に質問する』が3割強であることに注目し、「高校でも、発言したり教師に質問したりする生徒は少ない。しかし、そういう生徒は第1志望校に進学する確率が高い。質問を誘発するような授業を心掛けるなど、積極的な学習姿勢を身に付けさせる指導に、引き続き力を入れたいと思う」というものだ。

調査結果の詳細は下記ウェブサイトでご覧いただけます  
<http://view21.jp/k9531/>

Benesse教育研究開発センターのウェブサイトからも  
検索できます → <http://benesse.jp/berd/>

ベネッセ 研究 で 検索



茨城県立 **竜ヶ崎第一高校**

## 指導の継承

「例年のんびりとしている新入生が、導入期指導に刺激を受け、本気で勉強に取り組み始めました」

▶▶▶ P.18



# 指導**変革**の軌跡

そのとき教師は、そして生徒は  
どう変わったか



宮城県・私立 **古川学園中学校・高校**

## 進学指導

「本気で大学受験に取り組むことが、生徒の  
人間的成長を促す重要な機会になると実感しています」

▶▶▶ P.22

宮城県立 <sup>たか</sup><sup>はる</sup> **高原高校**

## 基礎学力の定着

「目標に向かって勉強を続けるうちに、自信を  
深めていく生徒の姿は忘れられません」

▶▶▶ P.26





◎土浦中学校龍ヶ崎分校として創立。校訓は「誠実・剛健・高潔・協和」。「文武両道」を校是とし、例年、国公立大や難関私立大に多数の合格者が輩出するほか、部活動では、2008年度、射撃部、陸上部、水泳部が高校総体に、陸上部、射撃部、弓道部が国体に出場した。

<b>設立</b>	1900(明治33)年
<b>形態</b>	全日制・定時制／普通科／共学
<b>生徒数</b>	1学年約280人
<b>09年度入試合格実績(現浪計)</b>	国公立大は、北海道教育大、東北大、茨城大、筑波大、埼玉大、千葉大、横浜国立大、金沢大、京都大、茨城県立医療大、首都大学東京などに計95人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、中央大、法政大、明治大、早稲田大、同志社大などに延べ585人が合格。
<b>住所</b>	〒301-0844 茨城県龍ヶ崎市平畑248
<b>電話</b>	0297-62-2146
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.ryugasaki1-h.ed.jp/">http://www.ryugasaki1-h.ed.jp/</a>

茨城県立  
竜ヶ崎第一高校

指導の継承

# 導入期指導を軸に 3年間の指導ストーリー 構築を目指す

変革のステップ

背景

◎学年主導の指導体制による弊害、最長赴任年数の短期化を踏まえ、学校としての「指導のスタンダード化」を目指す

実践

◎導入期指導を体系化し、全学年で共有。「筑波大を目指す学校」を掲げた全学プロジェクトを発足させ、指導の軸をつくる

成果

◎前年度の反省を踏まえた指導が可能となり、成績上位層の形成に成功。教師の目線合わせ、意識の共有化も進む

学年主導の指導体制が  
取り組みの継続性を阻む

茨城県立竜ヶ崎第一高校が「指導のスタンダード化」を模索し始めたのは、2008年度のことだ。同校は茨城県南部を代表する進学校で、例年、国公立大や首都圏の難関私立大に多数の合格者が輩出する。

しかし、地域の期待に応えられるような進学実績を安定して上げていたかという点、必ずしもそうではなかった。過去の現役国公立大合格者数を見ると、100人を超える年もあれば、70人程の年もあるなど、年度によって実績に差があった。学年主導の色が濃いために取り組みがなかなか継承されず、年度ごとに進学実績が揺らぐことが、積年の課題であった。

茨城県の教員配置にかかわる制度の変更も、同校に改革の必要性を痛感させた。進路指導主事の大和田浩一先生は、次のように話す。

「本県では、数年前から1校における教師の最長赴任年数が短期化されました。本校でも教師の異動が頻繁になり、ここ2、3年間で7割の先生が入替わっています。しかも、新しく赴任してきた教師の多くが、進学校での指導経験がありませんでした。教師の異動に左右されない本校としての指導スタイルを一刻も早く確立しなければならぬ、と強く感じました」

## 導入期指導で「竜一高生」としての 自覚とプライドを育てる

このような課題を踏まえ、3年間を見通した指導の体系化に乗り出した学年が、08年度の1学年だった。改革を主導した現2学年主任の渡辺隆文先生は、改革への思いを次のように語る。



茨城県立竜ヶ崎第一高校  
大和田浩一 Owada Koichi

教職歴32年。同校に赴任して9年目。進路指導主事。「裏方として、先生方を支援し、活力のある学校をつくってきたい」



茨城県立竜ヶ崎第一高校  
倉持正男 Kuramochi Masao

教職歴28年。同校に赴任して4年目。教務主任。「目の前の生徒は高校生の自分自身という気持ちで指導している」



茨城県立竜ヶ崎第一高校  
木村恵男 Kinura Shigeo

教職歴26年。同校に赴任して3年目。1学年主任。「困難なことにもあきらめず、挑戦する大切さを伝えていきたい」



茨城県立竜ヶ崎第一高校  
渡辺隆文 Watanabe Takamori

教職歴25年。同校に赴任して7年目。2学年主任。「生徒と教師が一つのチームとなり、一丸となって夢に向かっていきたい」



茨城県立竜ヶ崎第一高校  
菅原冬樹 Sugawara Fuyuki

教職歴13年。同校に赴任して6年目。3学年担任。「生徒の言葉を大切にして、変化に即応するよう心掛けている」

「07年度に3学年主任としての受験指導が佳境を迎えている時に、次年度は1学年の主任となることが分かりました。折しも入試の結果が出始め、『あの時はああしておけばよかった』などと反省し、指導を振り返っていた時期でした。次年度以降も今までと同じような指導をしていたのでは、これまでの実績を超えることはできません。新1年生の指導は、単年度で組み立てるのではなく、3年間を見通した指導をしたいと考えました」

まず取り組んだのは、導入期指導の見直しだ。生徒指導や規範意識の醸成、勉強の仕方の定着、部活動の奨励など、散発的だった取り組みを「Rプログラム」として体系化し、明文化した（P.20図）。1日も早く中学生から脱皮させ、「竜一高生」としての自覚を持つように促した。特に留意したのは、意識面の啓発だ。例えば、入学オリエンテーションで同校の歴史を学ばせ、竜一高生としての意識の醸成に努めた。

「08年度入学生が3年生となる10年度に、本校は創立110周年を迎えます。『伝統校として大きな節目を迎える年にふさわしい3年生になってほしい』という思いを込めました。1年生から始めた学年通信は通算141号になりますが、その名称を「Dream 2010」とし、生徒にも教師にも2010年を意識させるようにしています。卒業生にオリンピックで金メダルを取った先輩や、霞が関ビルを

設計した先輩がいる……。そのことを知るだけでも、入学した学校に対する誇りや帰属意識は高まります。歴史の重みと課せられた責任の大きさを思い、気を引き締めた生徒も多かったと思います」（渡辺先生）

## 生徒の実情に応じた見直しで 取り組みの形骸化を防ぐ

指導のスタンダード化を図る布石は、着々と打たれている。08年度に1学年担任だった木村恵男先生は09年度に1学年主任となり、前年度の取り組みを継続させると共に、生徒の実情に応じて、新しい取り組みを加えた。

課題の提出率が前年度より低かったため、国数英の課題の提出状況を月単位で表にまとめて一人ずつチェックし、最後まで提出しなかった生徒と個別面談をした。また、前年度の反省を生かし、学習時間が減り始める夏休み明けの授業では、4月に行った予習・復習の仕方を振り返る場を教科ごとに設けた。木村先生は、これらの取り組みの意図を次のように説明する。

「前年度と同様の取り組みだけでは対応できないと感じました。プログラムに縛られず、生徒の現状に合わせて臨機応変に対応することが大切だと思います。前年度に、一つひとつの取り組みをしっかりと効果検証したので、どの時期にどのようなことが起こるかを把握

## Rプログラム概要 (抜粋)

### (0) 竜一高生の育成

目標 真の竜一高生となるよう竜一高文化を学ばせる

指導計画	時期	指導方法・指導上の留意点	担当
① 竜一高の歴史を学習する	オリエンテーション 4月8日	(1)「百周年記念誌」のダイジェストを説明する ・校訓、校歌などの周知徹底 (2)「百周年記念誌」を読む ・図書館で2時間程度自由に読んでみる	道徳、コーディネーター、学年
② 竜一高の今を知る	オリエンテーション 4月10日	(1)最近の竜一高の学業・部活動の実績等を説明する ・大学合格状況について ・部活動状況について ・学校生活について	進路指導部、学年

### (3) 教科指導の内容・方法の改善

目標 高校の授業に早期かつ円滑に順応させる

指導計画	時期	指導方法・指導上の留意点	担当
① 新年度への準備	3月	(1)入学前の学習指導の準備 ・中学の学習事項の整理と復習が効果的に行えるように課題(テキスト)を購入する ・合格者に配布する資料と同時に、課題の説明をしたプリントも配布する	教科、英数国
	合格者説明会 3月19日	(1)入学前の課題の消化についての指導 ・入学までの期間に、中学校の既習事項の整理と復習が高校の授業に円滑に適応していくために不可欠であることを強調する。更に配布される資料は、その確実な定着を狙ったものであることを理解させ、計画的に消化するように指導する (2)「スタディーサポート」「課題テスト」の指導 ・4月9日、13日には、課題を消化して、万全の体勢で臨むように指導する	教科、英数国

※学校の資料を基に編集部が作成

できました。先手を打ち、学習法の再徹底ができたことが、非常に効果的でした。体系化された導入期指導のRプログラムがあつてこそ、このようなことができていると思っております。9月には、7月の模試結果を基に偏差値帯別に6グループに分けて集会を開いた。過年度に比べて模試の結果が芳しくなかったため、グループに応じた学習法を指導し、学習意欲の醸成に努めた。導入期指導が、形骸化せずうまく継承できているのは、単に前年度の取り組みを踏襲するだけでなく、生徒の状況に応じて改善を加えているからだろう。

## 導入期指導に刺激され 成績上位の集団ができる

「Rプログラム」は、現2学年の指導に応じ、半期ごとに取り組みを体系化・明文化している。そして、スタンダード化のために、学期終了時の職員会議で「Rプログラム」の実施状況を総括し、取り組みの内容や効果について教師全員で共有する。3学年担任の菅原冬樹先生は、次のように評価する。

「前期・後期の取り組みを学年ごとに報告するようになって、他学年の様子がよく見え

るようになりました。『2年生のこの取り組みには、こういう意味があったのか』など、3学年担任として、自分たちの学年がしてきた取り組みの意味も改めて確認しています。また、1年生前半のプログラムは、その後の指導にも重要な指標になるのだと気付きました。生徒の状態が少し乱れてきた際には、『導入期指導で育成すべき竜一高生像』に照らし合わせて検証すれば、できていない部分の指導を強化し、軌道修正ができるからです。導入期指導の徹底後、検証を繰り返すことで、大きく崩れる前に手が打てるのです」

導入期指導の見直し以降、現1、2年生の模試の結果は例年とは異なる推移を示している。例年、7月の模試は好調だが、11月、1月と下降線を描くのが常であった。それが、08年度の1年生は1年生後半になっても偏差値を下げる事がなかった。更に大きな変化は、08、09年度の入学生共、従来はそれほど多くなかった偏差値65〜75の成績上位層が厚くなり、成績下位層が減り始めていることだ。

「本校はどちらかというとのんびりとした生徒が多く、力があってもほどほどにしか勉強しない傾向にありました。そうした生徒が、導入期指導で刺激を受け、本気で勉強に取り組み始めたのだと思います。2年生の上位層は今も崩れることなく、他の生徒を牽引しています」(渡辺先生)

## 「筑波大を目指す学校」を掲げ 指導の軸を明確にする

「Rプログラム」による、3年間の指導の体系化・明文化と並行し、中長期的な視点から学校全体の方向性を模索する改革も動き始めた。09年4月に始動した「竜一プロジェクト2010」だ。「筑波大に現役合格できる学力の育成」を指導の中心に据え、3年間を見通した教科指導の確立を目指す。教務主任の倉持正男先生は、全学的なプロジェクトの狙いを次のように話す。

「生徒の学力や立地から考えても、筑波大は、目標として掲げたい大学の一つです。生徒の進学希望も多く、1年生の進路希望調査では半数以上が筑波大を第1志望に挙げます。しかし、実際に受験して合格する生徒は十数人です。成績が中・上位層の生徒を筑波大に現役で合格させられる授業や教材、定期考査などを本校のスタンダードとして確立し、安定的な進路実績を上げたいと考えています」

目標は筑波大現役合格20人だ。他大学を目指す生徒も多いが、それでも目標を筑波大に絞ったのは、教師の足並みをそろえるための象徴的な意味合いがあると、倉持先生は話す。

「本校は早慶上智、MARCH（\*）などの私立大への進学者も多くいます。そのため、指導の照準を筑波大にするのか、合格者の数を減らしてでも東京大や一橋大を目指すのか、

難関私立大や地元の茨城大に多数合格させるのか、絞り切れずにいました。筑波大を目標に掲げることによって、方向性が明確になり、教師の目線合わせが容易になります。今後、赴任してくる教師も相応の心構えが持てることを考えました。『本校の教壇に立った教師は、筑波大のエキスパートになれる』と言われるような学校にしたいと考えています」

「竜一プロジェクト2010」として指導方針や取り組みを明確にすることで、地域へのアピール材料とすることも狙いの一つだ。

「改革前には、地域の方から『竜一は何の指導もしていない』としばしば言われていました。しかし、渡辺先生の学年のように、果敢に改革に挑んでいる教師も大勢います。本校の取り組みを目に見える形にするためにも、筑波大を目標に掲げたプロジェクトを遂行する意味があるのです」（倉持先生）

## 筑波大入試分析で、生徒に 授業の重要性に気付かせる

「竜一プロジェクト2010」の一環として、「中長期的な展望を踏まえた提言」と「教師の指導力向上施策」を検討する組織が「筑波大研究委員会」だ。チーフは菅原先生、メンバーは進路・教務の各主任、1〜3学年主任、5教科の教科主任など約10人。09年4月の発足から9

月下旬までに、10年度からの55分授業導入（9年度までは50分）、家庭学習時間確保のための部活動の見直しといった改革を打ち出した。

「若手教師がリーダーとなることで、学校全体が活性化すると考えました。学校全体を動かす経験を積み、更に教師力を高めてもらうことも狙っています」（倉持先生）

今、委員会を中心に、筑波大の09年度入試問題分析集を作成している。国数英理社を「配点・時間」「問題数・出題領域」「問題の特色・難易度」「今後のアドバイス」の観点で分析し、全校生徒も閲覧できるようにする予定。1年生も取り組めるよう、各科目でA4判用紙の裏表に収まる範囲で問題を厳選。授業で使う教材と関連したアドバイスをし、授業の重要性に気付かせる。特に、1年生には秋の筑波大見学後に参照できるようにし、2年後の入試を実感させる。

「筑波大の難易度が年々上がる中、20人の現役合格者を出せる力は、まだ本校にはありません。まずは入試分析を素材として教科内で研修を行うなど、地道な作業を続けたいと考えています。取り組みに刺激を受けて、筑波大の22年間分の入試問題分析を自主的に行う教師が出てくるなど、先生方の意識の高まりを感じます。一つひとつの積み重ねが教師の指導力向上をもたらし、ひいては少々の環境変化では揺るがない『学校力』の構築に結び付くと信じています」（菅原先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2008年9月号指導変革の軌跡「山形県立新庄北高校」など

▶▶▶ <http://view21.jp/k9541/>



◎1990年に普通科を設置してから、大学進学実績を伸ばす。2003年、古川商業高校から現校名に改称。08年には、中学校を併設し中高一貫校となる。女子バレーボール部は、全国大会出場87回、うち優勝10回の実績を誇る。

<b>設立</b>	1954(昭和29)年
<b>形態</b>	全日制/普通科(進学コース、総合コース)・情報ビジネス科/共学
<b>生徒数</b>	1学年約400人
<b>09年度入試合格実績(普通科進学コース・現役)</b>	国立大は、東北大15人、筑波大1人、東京大1人、一橋大1人、東京工業大2人など計62人が合格。私立大は、岩手医科大、東北学院大、青山学院大、北里大、慶應義塾大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ276人が合格。
<b>住所</b>	〒989-6143 宮城県大崎市古川中里6-2-8
<b>電話</b>	0229-22-2545
<b>Web Site</b>	<a href="http://www.furukawa-gakuen.ac.jp/">http://www.furukawa-gakuen.ac.jp/</a>

宮城県・私立  
**古川学園中学校・高校**

**進学指導**

# 「一流の高校生になれ」 徹底的にかかわる指導で 生徒の意欲を引き出す

変革のステップ

**背景**

◎学習量を増やす指導で進学実績を伸ばしてきたが、生徒が受け身がちになり、進路実績が頭打ちとなる

STEP 1

**実践**

◎課題の出し方や勉強宿、補習、大学見学など、今までの取り組みを、「主体性を引き出す」という観点で改善

STEP 2

**成果**

◎生徒が自ら弱点を見つけ、学習するようになる。東北大合格者数が2桁など、継続的に高い進学実績を上げる

STEP 3

**一方的に与える指導が  
生徒の主体性を奪う**

宮城県大崎市に位置する古川学園中学校・高校は、1990年の普通科の設置以来、十数年で大学進学実績を大きく伸ばしてきた。躍進の原動力は、圧倒的な学習量にあった。土日は補習を行い、定期考査の追試に合格しなかった生徒には、夜11時頃まで補習を課した。学校行事は、2年生での修学旅行くらい。体育祭は商業科(現・情報ビジネス科)と合同で行うものの、進学コースの生徒は、後片付けもせずに、そのまま授業に突入するという徹底ぶりだった。

しかし、普通科設置から10年余りがたった頃から、次第に同校を取り巻く環境に変化が生じた。以前は、頑張った分だけ生徒の学力は確実に伸び、進学実績に結び付いていた。ところが、進学実績向上の効果で入学生の学力が上がり、目標が高くなるのに伴い、量だけでは思うように学力が伸びなくなっていくのだ。

教師が一方的に課題を与え続けることによる弊害も見られるようになった。2学年主任の阿曾等先生は、次のように話す。

「課題を与えれば生徒は素直に取り組みますが、それ以上のことはしようとしなくなりました。教師の都合で課題の作成が滞ると、『なぜ課題をくれないのですか』と言ってくるのです。『成績が上がらないのは、先生が

課題をくれないからだ』と言われたこともありました。そのような姿勢の生徒と接するうちに、過剰なまでに面倒を見てきたことは、生徒が自ら考え、行動する機会を奪っていたのではないかと考えるようになったのです」

圧倒的な量による指導について、生徒や保護者の受け止め方に変化も見られ始めた。それまでは、土日の補習に賛同する保護者は多かったが、ここ数年、「なぜ日曜日に親が学校に送り迎えをしなければならないのか」といった声が



古川学園中学校・高校教頭  
**俣野聖一** Marano Seichi  
教職歴22年。同校に赴任して17年目。「徳、孤ならず。必ず隣あり」



古川学園中学校・高校  
**阿曾等** Aso Hitoshi  
教職歴・赴任歴共に12年。2学年主任。「何事も手を抜かず、一生懸命取り組んでいきたい」



古川学園中学校・高校  
**成本豊** Narimoto Yutaka  
教職歴14年。同校に赴任して7年目。1学年主任。「生徒と共に歩き、成長できる教師でありたい」



古川学園中学校・高校  
**本田敦久** Honda Asuhisa  
教職歴・赴任歴共に14年。3学年主任。「誰かのために」頑張ることのできる人間を育てていきたい

\*鉢巻きは、団結を強める意味も込めて、3年生の生徒と学年団の教師が身に付ける。同校の恒例となっている。

寄せられるようになった。素直に指導を受け入れていた生徒も、徐々に疑問を発するようになった。俣野聖一教頭は次のように指摘する。

「数年前、3年生の担任をしていた時のことです。当時は毎日20時30分まで補習をしていましたが、『能率が上がらないので帰らせてください』と言い、最後まで補習に参加しなくなった生徒がいました。その生徒は最終的に東京大に合格しました。その時、冷静に学校の環境を見直し、圧倒的な量を一方的に教師が与えるだけではないのか、生徒自身が意欲を持って自ら学習できる環境こそが必要なのではないか、と考えるようになったのです」

量を与える指導から、生徒の主体性を大切にする指導へ――。学校が更に飛躍するためには、指導の転換が必要だと教師は感じていた。

## 一歩引いた指導が 生徒自らの弱点克服を促す

目指す方向は定まったが、これまでの指導の在り方を根本から変えたわけではなかった。学校の持ち味は残しながら、生徒が自らやる気を高められるように取り組みを見直した。

毎日行う補習は、終了を1時間早く切り上げ、毎日19時30分までとした。2泊3日の春期勉強合宿、5泊6日の夏期勉強合宿（P.25コラム参照）でも、普通科設置当時は午前0時を越えて

補習をしていたが、メリハリを付けて午前0時前には就寝とした（現在は23時）。日々の課題の出し方も工夫した。

「例えば、小テストでは、以前は範囲を示し、それに合った課題をできるだけ多く出していました。今は出題範囲を示すだけです。当初は、成績が下がるのではないかと不安を抱く教師がいましたし、保護者からは『これで大学受験は大丈夫なのか』という不安の声が多数寄せられました。しかし、生徒は質問しに來たり、テスト範囲に合わせてこういう課題がほしいと言いに來たりするようになり、結果的に成績が伸びました。生徒に判断させることによつて、かえって生徒自身が自分の弱点を見つけ、それを克服する方法を主体的に考えるようになったのです」（阿曾先生）

行事や課外活動は、生徒の意欲を高めるという観点から見直した。その一つは、「大学見学研修会」だ。以前は施設見学だけだったが、学習への取り組みの強化を狙い、各学年の位置付けを明確にした。1年次は東京大や慶應義塾大、早稲田大を見学し、大学のイメージをつかむ。2年次は東北大のオープンキャンパスに参加し、学問とは何かを知る。3年次は志望校、あるいは類似する大学のオープンキャンパスに参加する。志望校受験への意欲を高めると共に、大学生活をイメージさせるためだ。いずれの学年でも卒業生との懇談会を行い、高校時代の体験や



夏期勉強合宿での自習時間は、夕食と入浴を済ませた後の約3時間ある。黙々と自分の勉強に取り組む

大学生活について直接話を聞く機会を設けた。

こうした学校全体の動きに触発され、各学年や学級独自の取り組みも活発になった。1年生では、1年間で生徒全員が何らかの学校行事の実行委員を務める。生徒が自己効力感を高めると共に、互いを認め合える環境をつくるためだ。3学年主任の本田敦久先生の学級では、2年生の終わりの春期勉強合宿で「5か月後の自分へのメッセージ」を書かせ、それを3年生の夏期勉強合宿で各自に返却した。

「メッセージを読んでこの5か月を振り返ると同時に、受験本番となる5か月後を強く意識してほしいと思いました。そうすることで、一人ひとりが自分の置かれている状況に気づき、自律的に行動できるのではないかと考えました」(本田先生)

## 宣誓式・出陣式で学年を超えて 「受験は団体戦」の意識を高める

「受験は団体戦」といわれるが、生徒のやる気を高める上で、生徒同士、あるいは生徒と教師の団結は欠かせない要素だ。同校では、校内の結束を固めるための取り組みにも工夫を凝らしている。

団結に向けて重要な位置付けとなっているのが、夏期勉強合宿の最終日に行う「宣誓式」と、センター試験前日の「出陣式」だ。宣誓式では、2年生が立ち会い、3年生が一人ひとり壇上へ上がって「私は○○大を目指します！」と宣言する。出陣式では、3年生全員が受験校を発表し、それに対して1・2年生全員が「イケイケ○○(苗字)！ガンバレ○○(名前)！」と激励し、一人ひとりへの応援メッセージカードを送る。学年を超えた一体感が生徒を鼓舞し、受験に向かう勇気を与える。

「生徒同士の結束の強さには、私たちもしばしば驚かされます。志望校に不合格だった時、仲間や後輩の期待に答えられなかったことに申し訳ないと感じる。同じ志望校だった友だちが不合格だったと知ると、自分のことのように悲しい顔をする。深い絆で結ばれた生徒たちの姿は、我々教師が見てもうらやましく感じるほどです。この団結力があるからこそ、気持ち落ち込んで立ち直ることが

でき、厳しい受験を乗り越えられるのです」(本田先生)

宣誓式での3年生の姿は、2年生にも強烈な印象を与えるようだ。宣誓式の直後、2年生は勉強合宿での最後の自習を行うが、教師が指示をしなくても、生徒は黙々と自習に取り組む。また、勉強合宿後、2年生全員が書く決意文には、ほとんどの生徒が宣誓式に触れ、「自分にもあのように心のこもった宣誓ができるだろうか」「来年、堂々と宣誓できるよう自信を付けたい」などと心情を綴る。

団結の強さは、教師も生徒と同じだ。3年生になると、教師と生徒がそろって「絶対合格」の鉢巻きを締める。以前は、生徒のほかは教頭と進学指導部長だけが締めていたが、今では担任も身に付けている。

受験が佳境を迎える2月下旬には、直前合宿として、学校に泊まり込みで個人指導を行う。教師と生徒が一对一で向き合い、試験前日まで毎晩学習する。

「この時期は、教師との密接な関係の中で、生徒は話し方も考え方も大きく成長していきます。何としても志望校に合格してほしいという教師の熱意を感じ、周りに支えられてここまでできたことを実感するのでしょうか。本気で大学受験に取り組むことが、生徒の人格形成や人間的成長を促す重要な機会になっていると感じます」(俣野教頭)



## 教科指導を通して 生徒の人間の成長を促す

取り組みの見直しと併せ、生徒との密なコミュニケーションも心掛けた。学年ごとに面談期間を設け、きめ細かい生徒把握に努めた。また、毎日の質問の合間に交わされる雑談の中にも、生徒が発する兆候を見逃さないよう注意する。1学年主任の成本豊先生は、次のように話す。

「教科指導を通して生徒とかわる時間が多いため、本校の特徴です。朝8時の登校から、校門が閉まる20時までの間、教師は、授業はもちろん、休み時間や放課後も生徒の質問攻めにあいます。課題を提出しない、いい加減に取り組んでいる生徒がいれば、原因は何かを考え、生徒に話を聞きます。厳しい受験勉強にあきらめかけてしまう生徒も出てきます。そうさせないためにも、教科指導を通して生徒の内面的変化を探り、変化を見逃さないことが大切なのです」

勉強合宿などの宿泊行事も、生徒把握に欠かせないという。勉強合宿では1日12時間以上の学習をする。1、2日目はいつも通りに生活している生徒も、疲れがたまってくると次第に生活がいい加減になっていく。その時に、生徒の「人間力」が垣間見えると、俣野教頭は話す。

「本校では入学当初から、生徒に『一流の高校生になれ』と呼び掛けています。大学受

験では、学力はもちろん、学習に向かう姿勢や日常生活を含めた『人間力』が問われます。勉強合宿は、普段からきちんと生活している生徒にとっては何でもないことですが、保護者に任せっきりになっている生徒は、必ず生活が乱れてきます。布団を畳めない、服は脱ぎっ放し。そういう生徒は、成績が良くても、受験のピークを迎えると、生活は乱れ、精神的にも不安定になり、最後には競り負けてしまうのです。合宿は、日常生活の様子を見て高校生としての自覚を促すことも、重要な目的の一つです」

環境変化の波を乗り越え、順調な進学実績を上げ続ける古川学園中学校・高校。だが、本田先生は「改革は道半ば」と言い切る。

「あいさつや服装、言葉遣い、礼儀など、日常生活については、改善すべき点がたくさんあります。学校行事や生徒指導の中で、『一流の高校生』になれるよう鍛えていくのがこれからの課題です。それが出来た時、本校の更なるステップアップが実現するのではないのでしょうか。簡単なことではありませんが、教師が力を合わせて取り組めば必ず達成できると信じています」

08年には併設の中学校が開設された。今後は中高の接続など、中高一貫校ならではの課題も待ち構えている。教師の地方が問われるのは、むしろこれからのかもしれない。

### 各学年で年2、3回行う勉強合宿

勉強合宿時間割 2年次春期2日目

	2A	2B	2C	2D
6:00- 6:40 (40分)	英語小テスト、HR			
6:50- 7:55 (65分)	化学	数学	国語	
7:55- 8:45 (50分)	朝食			
8:45- 9:50 (65分)	物理・生物・地理			
10:00-11:05 (65分)	世界史・地理	数学	化学	
11:15-12:20 (65分)	数学	化学	世界史・地理	
12:20-13:10 (50分)	昼食			
13:10-14:15 (65分)	国語		化学	数学
14:25-17:30 (185分)	英語			
17:30-18:00 (30分)	夕食		入浴	
18:00-18:30 (30分)	入浴		夕食	
18:30-21:20 (170分)	自習			
21:30-22:00 (30分)	全体集会			

「燃える進学教育」を標榜する古川学園中学校・高校の特色の一つに、年に2、3回行う勉強合宿がある。1年次は入学直後、夏期、春期、2年次は夏期と春期、3年次は夏期、冬期（年末年始）、受験直前に行く。学校や宿泊施設に泊まり込み、ほぼ1日中、ほとんど休みなく机に向かう。

2、3年生の夏期と春期は合同で行う。互いに刺激を与え合うためだ。2年生にとっては、受験を目前に控え真剣に学習に取り組む3年生の姿に間近に接し、意欲を高める。3年生は2年生には負けられないというプレッシャーの中で精神力を鍛え上げるという狙いがある。合宿中は毎日テストがあり、順位を示して、上位者を表彰する。「短期間でも努力すれば成績は上がる」と実感させ、意欲を高める工夫といえる。

同校は、生徒の主体性を重視する指導に転換しつつあるが、厳しい学習を通して、生徒の人間の成長を促す勉強合宿の在り方は、今後も継続していく考えだ。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2007年9月号指導変革の軌跡「和歌山県・私立開智中学校・高校」など

▶▶▶ <http://view21.jp/k9542/>



宮崎県立  
高原高校

基礎学力の定着

# 「基礎学力とは何か」の合意形成が生徒の学ぶ意欲を育てる

◎宮崎県立都城農学校分校として創立。1952年に高原畜産高校として独立し、93年に現校名に改称した。「質実剛健」を校訓とし、地域と共にたくましく生きる人材の育成を目指す。夏祭りなどのボランティア活動、校外の清掃活動など地域との交流も活発。2011年に宮崎県立小林秀峰高校との再編統合を予定。

設立	1952(昭和27)年
形態	全日制/生産流通科・食品化学科・福祉科/共学
生徒数	1学年約120人
08年度進路実績	4年制大は南九州大に1人が合格。短大は宮崎学園短大、東洋食品工業短大に各1人が合格。その他、専修・各種学校21人、農業大学校4人。就職は72人で、うち県内が43人。
住所	〒889-4411 宮崎県西諸県郡高原町広原4981-2
電話	0984-42-1010
Web Site	<a href="http://www.miyazaki-c.ed.jp/takaharu-h/">http://www.miyazaki-c.ed.jp/takaharu-h/</a>

変革のステップ

背景

◎生徒の基礎学力不足に危機感を抱き、改革に着手。放課後補習などを進めるが次第に形骸化

STEP 1

実践

◎生徒の実態に即して取り組みを改善。漢字テストを基礎学力養成の中心とし、家庭学習指導、進路テストなどの改革を図る

STEP 2

成果

◎積極的に学習に向かう生徒が増加。進路決定率はほぼ100%となり、福祉科での介護福祉士国家資格合格率が8割を超える

STEP 3

「漢字をまともに書けない……」  
基礎学力定着の必要性を痛感

宮崎県立高原高校は、都城市から電車で約40分、天孫降臨の伝説の地として知られる高原町にある。生産流通科、食品化学科、福祉科の3科を擁する実業系の高校で、例年、生徒の7割が就職を目指す。

同校が「基礎学力の保障」をテーマとして改革に取り組み始めたのは、10年以上前のことだ。発端は、「学級日誌」で誤字脱字が散見されたこと。易しい漢字すらまともに書けない生徒が多いという現実だった。企業が新入社員に期待する力として、コミュニケーション能力や考える力などがよく挙げられるが、それは一定レベルの学力があつてのこと。進路指導主事の尾辻公一先生は言う。

「不況で就職状況が厳しくなればなるほど、企業が生徒を見る目は厳しくなります。就職はもちろん目標の一つですが、進路、教務、生徒指導が一体となって、社会で必要とされる力をいかに育んでいけるかが、本校の最大の課題なのです」

中でも大きな問題は、「基礎学力の保障」だった。同校には分数の掛け算、割り算ができない生徒が多くおり、更に小中学生レベルの漢字の読み書きが出来ずに教科書や問題文を読めないと訴える生徒もいた。危機感を抱いた教師は、

10分間の朝読書、漢字テスト、指名補習など、生徒の学力レベルに応じた取り組みを導入した。しかし次第に、教師の考え方の違いや多忙化などにより、足並みが揃わなくなっていた。例えば、基礎学力の定着のために始めた放課後補習の「つめくさタイム」についても、問題点



宮崎県立高原高校教頭  
**上池恭廣** Kamike Yasuhiro

教職歴23年。同校に赴任して2年目。「努力の積み重ねが明日の力に結び付く」ということを、生徒に伝えていきたい」



宮崎県立高原高校  
**栗屋勉** Kuriya Tsutomu

教職歴36年。同校に赴任して7年目。教務主任。「継続は力なり(習慣は第2の天性)をモットーに基礎学力定着に努めたい」



宮崎県立高原高校  
**相星正人** Aiboshi Masato

教職歴33年。同校に赴任して1年目。生徒指導主事。「生徒の進路実現、自己実現のための生活指導を心掛けていきたい」



宮崎県立高原高校  
**尾辻公一** Otsuji Koichi

教職歴32年。同校に赴任して5年目。進路指導主事。「生徒には試行錯誤を繰り返しながら成長してほしい」



宮崎県立高原高校  
**菊知一恵** Kikuchi Kazuo

同校に赴任して10年目。福祉科担当。進路指導部。「一人ひとりの夢や目標をかなえられるよう生徒を励ましていきたい」

が指摘されるようになった。これは、授業時間を45分に短縮して7時限目を設け、各教科と一般常識や作文など、基礎学力の定着の時間に充てるというものだった。ところが、評価のあいまいさや、授業とのつながりの薄さといった課題が浮上し、次第に形骸化した。取り組みの効果にも疑問が呈され、3年前に廃止された。

また、漢字テストでは、学年ごとに同一の問題を課し、70点未満の生徒は居残らせ、漢字の書き取りをさせるといった方法をとっていた。しかし、次第に居残り指導が機械的に行われるようになり、教師・生徒双方の疲労感だけが増していった。

## 漢字テストで小さな成功体験を積み重ね、「自己達成感」を高める

取り組みの形骸化が進んだが、同校最大のテーマが「基礎学力の保障」であることに変わりはなかった。今度こそ、取り組みをより効果的で、継続可能なものにしていく必要があった。

まず取り組んだのは、「つめくさタイム」に替えて、漢字テストを基礎学力定着の中心に据えることだった。教務主任の栗屋勉先生は、その狙いを次のように話す。

「取り組みを継続させるには、むやみに手を広げず、いかに学校の実態に即した取り組みにできるか、そして、教師全員の合意を得

られるかにかかっていると思います。『つめくさタイム』が続かなかった要因として、教師間で『基礎学力とは何か』についてのコン

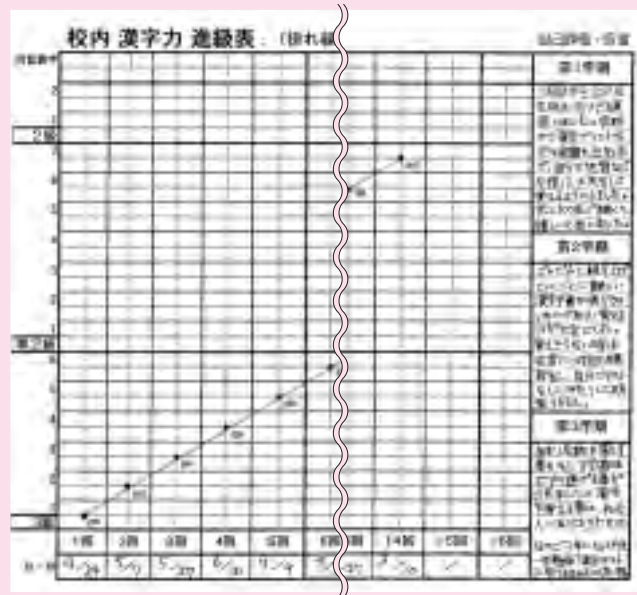
センサスが得られなかったということがありました。例えば、数学の教師は方程式を身に付けさせるべきだと考え、公民科の教師は現代用語を覚えさせるべきだと主張する。しかし、そうした話し合いの中から、『漢字の読み書きこそが文章読解のための土台であり、すべての教科に通じる基礎学力ではないか』という意見が出てきました。しかも、どの教科の教師でもわかる内容であるため、他教科の指導をするよりも負担が少ない。漢字テストをより効果的に運用することで、新たな取り組みの突破口にしたいと考えました」

従来の漢字テストは、テストと補習の繰り返しで前向きに取り組もうとする意欲を喚起するには不十分だった。改善に当たり意識したのは、単に漢字力を付けるだけではなく、生徒の達成感を高めるような取り組みにすることだった。

そこで導入したのが、進級方式だ。漢字テストに2〜5級の等級を設け、合格すると上の級に進級するスタイルに改めた。テストは年10〜15回で、テキストの各級の範囲を細分化し、それぞれの範囲について5パターンの問題を用意。いずれか一つに合格すれば、次にステップアップする。

更に、生徒が自分の成長を把握できるように

校内漢字力進級表



漢字テストに合格したら該当の箇所印を付け、折れ線グラフを作っていく。自分がどれくらい達成したのか、一目で分かるようにした ※学校資料を基に編集部が作成

「校内漢字力進級表」(図)を用意した。縦軸を級、横軸をテストの回とし、合格すると当該箇所に印を付ける。進級ごとに認定書を発行し、成績上位者は年度末に全校生徒の前で表彰する。上池恭廣教頭は、次のように述べる。

「本校の生徒の中には、小中学校時代にあまり手をかけてもらえず、劣等感を抱いたまま入学してくる者もいます。いかに劣等感を取り除き、自信を持たせてやれるかが、本校の使命の一つです。目標を設定し、それを克服するといふ小さな成功体験を積み重ねることによって、人生を積極的に生きていこうと

する意欲を育ててほしいと思っています」

### 家庭学習の習慣化によって地道な努力の大切さを知る

家庭学習指導も見直した。同校では、10年以上前から、毎日、ノート1ページの家庭学習を課してきた。内容は自由だが、生徒によっては単語練習のつもりか「cat, cat... , dog, dog...」など大きな文字で『宅習ノート』を埋めてくる者もいた。中には全く手を付けず、30〜40ページもため込む生徒もいた。

「生徒にしてみれば、中学時代から家で勉強した経験がほとんどなく、勉強法が分からないのです。そこで、新入生オリエンテーションの時に上手に学習している先輩の宅習ノートをコピーして、見本として配布しました。また、宅習ノートは朝のSHR後に集め、午後に返却するという流れを明確にしました。まだすべての生徒に家庭学習の習慣が定着したわけではありませんが、学力的に厳しい状況から地道に家庭学習を重ね、介護福祉士の国家試験に合格した生徒も大勢出てきています。家庭学習を継続すれば、確実に力が付くことを繰り返し伝えたいと思

ます」(尾辻先生)

家庭学習では、まずは内容よりも「家庭学習の型」そのものを身に付けさせることが大切だと、生徒指導主事の相星正人先生は述べる。

「家庭学習の習慣が身に付いていない生徒には、机に向かわせることだけでも習慣付けさせることが重要です。最初は単語の羅列であっても、丹念に指導し、学力向上に結び付けていけば、おのずと家庭学習の内容も向上していくのではないのでしょうか。教師があきらめず地道な指導を積み重ねていくことが、生徒の学力を伸ばすと考えています」

### 目標に向かう粘り強さで介護福祉士合格率が8割を超える

新しい試みも積極的に取り入れている。3年前に導入した「進路テスト」もその一つだ。就職試験で問われる一般常識を身に付けさせると共に、1年生から実施して早期に進路意識の醸成を促すことが狙いだ。テストは、学年ごとに使用するテキストからあらかじめ出題範囲を伝え、年9回、朝のSHR後の30分間で行う。成績優秀者は年度末に表彰し、漢字テスト同様に生徒の自己達成感を高める。

一連の取り組みによって、学習に対する生徒の態度は徐々に好転してきている。保護者から「中学時代には全く勉強をしなかったけれども、

高校入学後は自分から机に向かうようになった」という声が寄せられるようになった。また、企業への内定者も徐々に増え、08年度は進路決定率がほぼ100%となった。福祉科では介護福祉士の合格状況が好調で、合格率は07年度が75%、08年度は83%を超えた。家庭学習の習慣化や各種テストの効果が表れているといえそうだ。福祉科の菊知一恵先生は、次のように述べる。

「07年度の合格率が高かったため、08年度に受験した生徒は相当のプレッシャーを感じていたようです。『先輩には負けられない』という強い思いで受験に臨んでいました。小中学校時代にはほとんど勉強しなかった生徒たちが、資格取得という目標を持って勉強を続けることで、自信を深めていく姿は忘れられません。生徒たちの頑張りが、我々教師にとっても励みになっています」

## 将来の目標を持つことが 学校生活への意欲を高める

ただ、いかに教師が手厚い指導をしても、学

びに向かおうとしない生徒がいることは確かだ。「意欲の低い生徒は、能力がないのではなく、将来の目標が持てないために、向上心がわいてこないのだと思います。福祉科の生徒は、『介護福祉士の国家資格の取得』という目標があるので、学校生活に対する意欲を維

持しやすい。しかし、漠然と就職を希望している生徒は、何を目標として学校生活を送ればいいのか探しあぐねているのが現状です。求人票次第という不安定な進路選択を強いられる中で、生徒の意欲をいかに高めていくかは、依然として大きな課題です」(尾辻先生)

同校が「一人一目標」をスローガンとしているのも、目標を持たせることで充実した高校生活を送って欲しいという思いからである。「家庭学習にきちんと取り組む」「資格を取る」「ワープロをマスターする」など、生徒一人ひとりが1年間の目標を掲げる。

また、毎年行う卒業生による進路講演会や3年生の進路体験発表会も生徒に目標を持たせる工夫の一つだ。08年度からは『わだち』という冊子にまとめて配布し、いつでも生徒が目を通すことができるようにした(コラム参照)。

同校は、11年度に宮崎県立小林秀峰高校との再編統合が決まっている。あと2年間で改革の成果を上げ、今後へとつなげていきたいという。

「小さな試みであっても、教師全員が力を合わせれば大きな力になります。本校がなくなるのとても寂しい気がしています。しかし、それを乗り越えて一丸となった教師の心意気を、新しい学校にも伝えていきたい。今後4年間の取り組みの中で本校が存在したという証を残し、惜しまれる学校として幕を閉じたいと思っています」(上池教頭)

## 3年生と卒業生の体験談『わだち』



高原高校では、就職した卒業生による「進路講演会」を毎年12月に実施する。更に、2月に就職活動を終えた3年生による「進路体験発表会」も行われる。「わだち」は、それらの講演内容をまとめた冊子だ。先輩の体験談を通して、1、2年生に学校生活を見直して欲しいという願いが込められている。過酷な就職活動をくりぬけてきた先輩の声は、実感がこもっている。「資格取得や部活動も大事だけれども、学ぶことも大切。先生の注意がうるさいと感じることもありますが、それは私たちのことを思って言ってくれていることに気付く時が必ず来ます」「自分はどのような職業に就きたいのか、どんな夢があるのか、先生や家族とじっくり話し合ってください」「遅刻や欠席を繰り返して、いざという時に苦しむのは自分自身。勉強も自分の進路を広げるために頑張るべきです」

そうした先輩のアドバイスを、在校生はしっかり受けとめているようだ。「目標を立てずに毎日を過ごしていたら、3年間を無駄にしてしまうと気付きました」「勉強も資格取得も、取り組んだ分だけ自分に返ってくると分かりました」

講演会や発表会は、各家庭で進路について話し合うきっかけにもなっているという。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。  
2009年9月号指導変革の軌跡「千葉県立姉崎高校」など  
▶▶▶ <http://view21.jp/k9543/>

# 「2年生0学期」を見通した 1年生2月までの学習習慣の定着

高校3年間の中でも、1年生の12月以降は、特に中だるみに注意が必要な時期である。それは、生徒自身の高校生活への慣れ、油断もあるが、何よりも教師が多忙となり冬休みを境にした生徒の生活の乱れを見逃してしまうことが大きな原因になっている。生徒に掛けられる時間が取れなくなる中での「2年生0学期」の指導を考える。

※データは、高校の先生方へのヒアリングを基に編集部が作成したサンプルです

教師の意識をすり合わせるために

図1 2年生0学期を教師が俯瞰するスケジュール表

ダウンロード

	12月	1月	2月	3月
学校に来る日数	18日	20日	15日	12日
行事	期末テスト(2~4日)/面談(15~17日)/学年集会(18日)/終業式(22日)	模試(23日)	校内模試(10日) 学年末テスト(17~22日)	学年集会(15日) 修了式(19日)
意識付けしやすい場面	・面談 ・学年集会	・新年最初のHR ・センター試験 ・模試	・校内模試 ・私立大入試 ・国公立大個別学力試験	・学年集会 ・3年生の進路決定
教師間で共有すべきテーマ・目標	生徒が充実した冬休みを過ごせるかは、冬休み前の指導で決まる!	年始のやる気を入試とリンクさせ、より高める	手が掛けられない時期。最小限の手間で生徒に目標を持たせる	「2年生になってから」ではなく、「2年生になる前に」を徹底する
この時期の具体的な方策	特に下位層の生徒には、リセットさせる最適のタイミングとし意識付ける	入試の緊張感を現3年生の具体的なエピソードで分かりやすく伝える	大まかな入試制度を説明して、志望大について考えさせる	各教科からの自宅学習の課題を学年でまとめ、質と量を調整する

学年団で検討して、4月の段階では見えなかったこの学年の特性を踏まえ共感度の高い言葉にすることで、学年団の団結力が高まる。具体的な方策は、「進路」「教科」「生徒」など、細分化してもよい

1

2月までの学習習慣定着のため学年団で協同する

ノウハウ、経験を共有するために

図2 生徒の学習意欲が高まった時と教師の仕掛け

ダウンロード

	1年生7月 国数英総合	1年生11月 国数英総合	生徒の声(学習意欲が高まった出来事・声掛け)	教師の指導の工夫
Aさん	50	53	1年生の夏休み明けに行った学習記録の作成をきっかけに、毎日同じ時間に家庭学習を始める習慣が身に付きました。「これだけでいいからやっごらん」と先生が言うので、出来そうだったのでやってみました。	夏休み明けは、学習習慣と生活習慣の乱れが目立ったので、2週間に渡って学習記録を付けさせました。その際、「家庭学習を始める時間か、就寝する時間どちらかだけでも固定してみよう」と生徒に宣言させました。
Bさん	48	55	初めて臨んだ校外模試で、想像以上に悪い成績を取ってしまいました。がっかりして勉強をやる気もなくしていたところ、先生から「キミは毎日課題もちゃんと出しているから、絶対にこれから伸びるよ」と励ましてもらいました。	模試の後は、学習習慣と学力のバランスをチェックして、「勉強しているのに成果が出ていない」など気になる生徒をピックアップして、声を掛けています。とにかく、自信を持たせるため、「やればできる」と繰り返しました。
Cさん	51	57	英語の授業中に、先生が話してくれた先輩のことが記憶に残っています。運動部に入っていた過去の卒業生が、通学の時間を利用してど	成績や志望校、部活動など、生徒が自分との共通項を見つけやすいように配慮しながら、「先輩はこんなふうに努力することで志望する大学

現2年生に、1年時の3学期に「意欲が高まった出来事・声掛け」などのアンケートを取ってもよい。また、生徒へのアンケートなどの時間がない場合でも、担任教師の個々の取り組みは情報交換したい

ダウンロード

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

## プラスαの指導

### 達成感を味わえる 無理のない環境をつくる

1月中旬くらいまでに、学習時間調査を実施する。学習時間をクラス間で競わせて、団結力を醸成していく。なお、その際、生徒が何を勉強すれば良いかわからない状態にならないように、教科間で課題の量を整理して、「学校からの課題をこなせば、高校生として望まれる一定の学習時間がほど良く確保できる」という環境をつくる。ある教科が課題を出し過ぎたり、課題がどの教科からも出されず学習が途切れたりしないように、日々達成感を味わえるバランスの取れた環境にしていきたい。

### 大学・学部への関心を 高める多様な仕掛けを

高校生活1年目も終盤になるこの時期でも、生徒の大学・学部に関する知識は乏しいのが現実だ。だが、具体的に志望大を挙げられるようになった生徒は、主体的な学びへと大きく傾く。志望大との出会いにつながるきっかけはまさに多様で、こうすれば良いという答えは存在しない。だからこそ、さまざまな視点、タイミングで生徒への働き掛けが必要になってくる。「大学・学部」を常に教師が意識し、自身の体験を語るなど、地道な働き掛けを改めて見直し、取り組んでいきたい。

### 上位層の生徒には 2ランク上の提示で刺激する

難関大に挑戦できる可能性を持った生徒には、できるだけ早い時期に入試を意識させ、受験のための学習に少しずつ取り組ませることが重要だ。そこで、志望大が決まっていない生徒には、今の学力では合格は不可能な2ランク上の大学名を面談などで挙げて、「今から必死で頑張れば何とかなるかもしれない」と声を掛ける。想定外の難関大の名前に生徒は驚きながらも、「自分にそんな力があるのか」と潜在能力を肯定的にとらえ、学習に前向きになるきっかけとなることが多いようだ。

### 活用後のフォロー

◎2月以降の生徒の様子から、期待通りの効果が得られた生徒、残念ながら中だるみの状態になってしまっている生徒など、取り組みの成果が個別に見えてくる。生徒一人ひとりの状況を検証することが重要だ。その上で、4月の進級までに打てる手はないか、更に2年生のクラス担任に引き継ぐことはないか協議して、可能性を次につなげていく。生徒に「自分はこんなものだ」と思わせてはならないように、教師も「この生徒はこれくらいだ」とあきらめてはならない。生徒が変わる可能性、タイミングはこの先も数多く潜んでおり、それを生かせるかどうかは学年団の意識と働き掛けに懸かっている。

データ活用  
のねらい

## 目標達成のため学年団で団結

「2月までに学習習慣定着」を学年団の目標に●1年生の12月以降は、生徒が学習から離れてしまいやすい時期だ。入試はまだ先で、一方で部活動での役割は大きくなる。また、「自分の成績は大体このくらい」という定位置が見えてしまい、あきらめモードになる生徒も出始める。年が明けた2月以降は、高校入試などで登校日も減り、一層生徒のために時間を取りにくくなり、学びから離れた生徒が見過ごされる危険もある。そうならないために、「2月までに、自学自習の習慣を確立すること」を学年団としての共通目標にしたい。

生徒の学習意欲を高める手法を学年団で共有●学習離れが進むことで、学年全体としては学力が二極化しやすい。そのため、各層ごとの対応策を学年団で共有することが重要だ。その際、「生徒の意欲を高めることに成功した具体的な働き掛け」を、エピソードとして共有することで、学年全体で生徒を育てていく雰囲気を醸成し、学年団の経験値を高めていく。

データ活用  
の流れ

## 今後を見通し、ノウハウ共有に着手

生徒に手を掛けにくい現実を客観的に把握●まずは12月中に、**図1**を活用して、登校日数や行事を俯瞰的に把握する。「生徒に手を掛けられる時間がこんなに少ない」という事実を、学年団で同じレベルの危機感を持って共有したい。4月の段階では秋以降の学年目標が言語化されていないケースもあるので、この機会に検討する。併せて、「意識付けしやすい場面」「この時期の具体的な方策」など、生徒の学習習慣を定着させる具体例を学年団で議論したい。

クラスの仕掛けを共有する●1年生に、「学習意欲が高まった出来事・声掛け」についてアンケートを取る。教師の働き掛けで意欲が高まった事例について、その教師がエピソードを詳しく紹介することで、効果的なノウハウ共有の場になるだろう(**図2**)。1年生だけでなく、2年生と共同で行うなど、広く取り組んでいきたい。

### 12月、1月に いかに 意識付けるか

生徒の学力、学習習慣、生活習慣などの現状を学年団で再確認する

3月までの行事や生徒の状況などを学年団で共有する(**図1**使用)

これまでの生徒の意欲を高めた指導の経験を情報交換する(**図2**使用)

2月までの指導の方向性を共有し、実践。春休み前に、しっかりと検証する

自分を振り返らせることで、課題を発見させる

図3 模試成績の振り返りをさせ、新入生へのアドバイスを作成させる

ダウンロード

	1年生7月 国数英総合	1年生11月 国数英総合	模試の振り返り	新入生へのアドバイス
Aさん	47	55	1年生の初めての模試は、思った以上に成績が悪くて正直焦りましたが、先生と話したところ「結果は気にしないでいいので、復習をしっかりやろう」と言われました。そこで間違えた問題をノートに書き出し、何回も解きました。すると、次の模試では偏差値も50を超えたのです。模試は復習することが大切なのだと分かりました。	「模試は範囲が広いので勉強できない」はウソです。僕は復習をしたので成績が伸びました。何事も復習が大事だと思います。もちろん、中でも一番大事なものは授業の復習です。今までやってきていない人は、ノートを読み返し、分からなかったところにラインを引き、翌日先生に質問してみてください。これだけで授業が分かるようになります。偉そうに書きましたが、部活が大変なので僕は予習は出来ていません(笑)。
Bさん	52	58	成績を着実に伸ばすことができたのは、苦手な数学で何とか基礎的な問題を解けるようになったからです。先生に基本問題をつくってもらい、それを毎日やった成果だと思います。部活で忙しい毎日ですが、「これだけは」という勉強を必ずやるのが大切です。	自分の苦手を早めに見つけることが大切です。そして基礎的な問題を繰り返し、分からないことは先生にその都度確認しましょう。使うのは、朝の小テストで使っている問題集がいいと思います。どんなに苦手でも必ず克服できます。今のうちに得意不得意を意識して勉強することが、2年生になって生きてきますよ。

具体的な学習法や教材を盛り込むように、回答時に依頼しておくとういだろう

同級生や先輩の事例に学ぶ

図4 7月模試と11月模試の校内順位上昇者の例

ダウンロード

	7月	11月	上昇順位	生徒の学習習慣・進路意識など
1位	271	74	197	授業の予習、復習をしっかりとするようになった。特に、冬休みに、英語と数学を毎日3時間ずつ学習し、学習習慣を確実に定着させた。
2位	219	47	172	苦手な数学を冬休み中に、しっかり取り組んだ結果。
3位	287	120	167	部活で多忙だったため、復習だけは1日2時間徹底した。また、志望大に合格した先輩の学習方法を当時の担任から聞くことで、目標に対する意識も高まっていた。

本人の了解を得て紹介。2年生が1年生11月、1月に受けた模試を利用してよい

図5 卒業生の1年次の冬の平均学習時間

ダウンロード

進学大学	学習時間(平日)	部活動状況	学力の特徴・学校生活の様子
●●大	180分	テニス部 高3夏まで部活	予習・復習だけは毎日しっかりとこなしていた。
〇〇大	100分	野球部 高3夏まで部活	普段は復習だけ。通学時間に暗記ものをやっていた。
△△大	120分	卓球部 高3・5月まで部活	長期休暇中は部活動の時間が少なく、その分、学習を重視。
◆◆大	110分	吹奏楽部	
□□大	100分	書道部	

生徒のデータを学校として管理・蓄積しておくことで、このようなデータ作成が容易になる。「生徒にどのようなデータをどう提示すれば効果的か」という視点で校内のデータを見れば、生かせるものは多いだろう

このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。  
<http://benesse.jp/berd/> →HOME>情報誌ライブラリ(高校向け)>生徒指導・進路指導ツール集

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！右のウェブサイトをご覧ください。

●2006年12月号  
 「1年生冬休み前の意識付け」

●2009年2月号  
 「1年生春休み前後の学習意識の向上」

Benesse® 教育研究開発センター

<http://benesse.jp/berd/>
生きたデータの徹底活用  クリック!HOME→情報誌ライブラリ(高校向け)→  
 生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください加工可能な資料が  
ダウンロードできます!生徒指導・  
進路指導ツール集ウェブサイトから  
ダウンロード!



## プラスαの指導

### 教師の高校時代や 当時の勉強法を語る

学校として「本校の生徒にはこれを望む」という基本的な学習方法を提示することは大切だ。しかし、必ずしもすべての生徒がその通りにできるというわけではないのが現実だ。だからこそ、他の生徒や先輩の学習法を紹介したり、更に教師自身が高校時代に実施していた学習法を紹介したりするなど、さまざまな観点からの勉強のやり方を知らせることが重要だ。1年生のうちに、いろいろな勉強法を試し、自分なりのスタイルを考えさせたい。

### 学習計画、 学習記録を活用する

直近の模試や期末テストに向けて、学習計画を立てさせ、その結果を記録することをこの時期に経験させる。1日の生活の中で、「学校（授業）」「部活動」「通学」などを除いた可処分時間がどのくらいあるかを把握させることも大切だ。1日の時間の流れを俯瞰させて、それぞれを充実させることが重要だということを伝える。規則正しい生活やちょっとした空き時間の活用などへのスタートとしたい。学習記録を基に、生徒同士で、時間の使い方を議論しても良いだろう。

### 12月にアンケートを実施し、 生徒の現状を把握

「学習時間」「模試の成績」「生活習慣」「悩み」「入学してから悔しかったこと」「学習意欲が高まった出来事・声掛け」「効果的な学習法」「来年の目標」などの項目で、12月中にアンケートを実施したい。これは集団特性の把握よりも、生徒個々の把握と生徒自身の気づきを促す取り組みだ。冬休みにしっかり学習させるためにも生徒と教師が現状把握をし、各生徒の指導すべきポイントを絞り込む。一見大きな問題がなさそうな中位層を、放っておくことなく声掛けをする材料にもなる。

### 活用後のフォロー

◎さまざまな観点からの学習の仕方を生徒に紹介することと並行して、「予習・授業・復習という学習サイクルが基本」「教科書の内容を定着させることが重要」「3点固定（起床時間、学習開始時間、就寝時間を毎日同じにする）の学習スタイルが大切」など、学習習慣の土台となる考え方は、生徒に繰り返し伝えたい。塾などで教えられたテクニックに安易に走る生徒がないかにも気を付けておくことが重要だ。今後、生徒にはまだ軌道修正のチャンスは残されているので、「自分なりの学習スタイルを見付けるために、試行錯誤していい時期だよ」と生徒に伝え、教師側も粘り強く指導を続けたい。

データ活用  
のねらい

## 過去を振り返らせ、具体的な行動へ

**4月からの自分の学習スタイルを振り返らせる** ●冬休み前の12月中に、これまでの学習スタイルを振り返ることで、今後どのようにしていけば良いかを生徒に考えさせたい。入学直後に提示した高校生としての学習方法が定着しているかも確認する。学習に対する具体的な課題意識を持たせて、冬休みを迎えさせる。

**生徒のアクションにつなげる具体的なやり方を提示** ●定期テストや校内模試、校外模試などを複数回実施してきて、生徒は自分の学力的な位置が大体分かってくる。特に、成績中下位層には、あきらめかける生徒も多い。「最低限これだけは」という課題を学年で統一して与え、毎日チェックするなど、中下位層の生徒には、学習のペースメーカー的な役割を果たしたい。また、日々確実に学習をこなすことで、小さな達成感を味わえる機会を提供することもできる。

データ活用  
の流れ

## 自分を分析し、事例に学ばせる

**模試の振り返りを生かして学習意欲を高める** ●まず、模試の成績推移を振り返らせ、今後の意気込みを書かせる。次年度の1年生へのアドバイスとして、客観的な視点で書かせることもできる。そうすることで、自分の学習の仕方を再度確認させると共に、2年生への自覚を持たせる。なお、この時のアドバイスは、模試だけに限らず、部活動、生活など、自由なテーマにした方が、生徒は書きやすい。冬休みの宿題にしても良いだろう。後日、**図3**のようにまとめて配布することで、生徒の意識付けの資料になる。

**成果が出ているデータと具体的な学習方法を提示** ●あきらめかけている生徒には、「自分もやればできる」という意欲を持たせるため、同じような状況だった同級生や先輩のデータを活用するのが良いだろう。ただし、単に偏差値の推移などを紹介するだけではなく、その生徒の学習時間に変化が見られた時期ときっかけや、具体的な学習方法なども併せて紹介することが重要だ（**図4、5**）。

### さまざまな 具体的な学習の 仕方を紹介

HRなどで、学習に関して、アンケートを取るなどして、振り返りをさせる。模試の振り返りは、まとめてから生徒に配布（**図3**使用）

同級生や先輩データなどを活用し、自分もやればできると思わせると共に、具体的な学習法を提示（**図4、5**使用）

高めた学習意欲を生かして、学習時間調査期間などを設けるなどしながら、実際に学習をさせる

生徒がしっかり学習できているか、学習記録や面談で、その都度確認する

### 鳥取という地の利を生かし 「人の役に立つ」乾燥地研究に挑む

鳥取大 乾燥地研究センター 生物生産部門 恒川篤史研究室

乾燥地は世界の陸地面積の約41%を占めている。そこには、砂漠化や人口増加による食糧難、貧困といった課題が山積している。乾燥地での生活環境を改善し、人々の営みを少しでも豊かにしていくにはどうすればよいのか。鳥取大の恒川篤史教授（グローバルCOEプログラム「乾燥地科学拠点の世界展開」の拠点リーダー）は、乾燥地の現状分析にとどまらず、現地の人々が植えることによって収入を得られる植物を研究する。目指すは、持続可能な暮らしや生態系づくりだ。

#### フローチャートで分かる恒川研究室

##### 大学院生の 主な出身学部

農学部

工学部

理学部

など

◎中国やエチオピアなどからの留学生が研究室の半数以上を占める。農学部で学んだ植物の栽培技術を生かして乾燥地の緑化に取り組んだり、理学部の知識を人工衛星からの遠隔探査（リモートセンシング）に生かし、砂漠化の進行度合いを観測したりといった大学院生がいる。

##### 研究にかかわる 学問と研究内容



◎乾燥に起因する植物の生育不良や乳幼児死亡率の高さ、過放牧、薪炭材の過剰採集、土壌の塩害、人口増加、貧困など、乾燥地が抱える課題は多様だ。そのため、関連する学問領域が多岐にわたる。

##### 研究成果と 社会のかかわり

砂漠化の防止

持続可能な  
生活の実現

自然エネルギー  
利用

など

◎乾燥地に暮らす人々の生活の向上や生態系の維持を目標とする。生活水準が上がれば教育を受ける機会が広がり、教育水準が上がれば土地の管理技術が根付き、砂漠化の食い止めにつながる。そうした好循環を生み出すことを目指している。



恒三篤史 教授 Tsunekawa Atsushi

鳥取大乾燥地研究センター教授。農学博士。専門は保全情報学と環境計画学。東京大大学院農学系研究科農業生物学専門課程博士課程修了。環境庁国立公害研究所(現・国立環境研究所)研究員、アメリカ・ハーバード大留学、東京大大学院農学生命科学研究科助教、内閣府総合科学技術会議事務局参事官補佐併任(環境・エネルギー担当)を経て、現職。文部科学省のグローバルCOEプログラム「乾燥地科学拠点の世界展開」の拠点リーダーも務める。

研究内容

# 鳥取発の緑化研究を世界の乾燥地に広げる

日本には砂漠も乾燥地もありません。しかし、世界では陸地面積の約41%を乾燥地が占め、世界人口の3分の1に当たる約20億人がそこで暮らしています。乾燥地は、雨が少なく、植物が育ちにくいという特徴があります。そのため、湿潤地域や森林地域に比べて、経済的に貧しい状況になりやすく、人口増加率や乳幼児死亡率が高く、健康・衛生面で多くの課題を抱えています。経済的に豊かで、むしろ人口減少が課題である日本とは正反対の状況です。

それでは、日本は乾燥地の問題と関係がないのかというと、決してそうではありません。例えば、中国か

ら春風に乗って日本にやって来る黄

砂は、黄土高原などの砂漠化が一因ともいわれています。また、石油の多くは、乾燥地の国々から日本に輸入されています。この石油の利権をめぐる世界規模の争いも、乾燥地に住む人々を苦しめる要因なのです。日本が国際社会の一員として、乾燥地を支援するのは当然なのです。

発展途上国では、燃料にするために木を伐採します。人工衛星からの画像を見ると、村の同心円状に砂漠化しているのが分かります。一方、乾燥地は風力発電や太陽光発電に適しています。工学の研究者と協力しながら、自然エネルギーへの切り替えも促進しています。現在、乾燥地の研究は、医学や経済学とも関係し、学際的な研究へと広がっています。その中で、私は乾燥地で植物を育

てる方法を研究しています。豊富な油分を含む種子からバイオディーゼル燃料が取れるジャトロファ(生物学名ナンヨウアブラギリ)に注目し、乾燥地研究センターの研究施設を利用して栽培や実験を重ねています。

ジャトロファには二つの利点があります。一つは、乾燥地ややせた土地でも育つこと。バイオエタノール生成に使われているサトウキビやバイオディーゼル燃料に使われているアブラヤシは、乾燥地ではなかなか育ちません。もう一つは、ジャトロファは有毒性植物で、人間はもちろん、家畜も食べないということです。家畜の放牧地にこの木を植えても、食害を回避出来るのです。乾燥地では、収穫した種子だけでなく、栽培に必要な水や土地も含めて、食糧とエネルギーが競合しないことが重要なのです。砂漠の緑化やエネルギーの確保に加え、現地の人々が現金収入を得て、持続可能な生活を営めるよう、ジャトロファの生理生態や栽培法を研究しています。

ただ、実用化には課題があります。経済的に採算が合えば現地の人たちの手で自ずと植林が進みますが、現

段階では採算が取れません。解決策の一つは、品種改良による生産力の向上です。イネやトウモロコシは、品種改良で高い生産力や病気に強い性質などがつくられてきましたが、ジャトロファはまだその段階にありません。今後の品種改良を見据えて、多くの野生種が自生しているメキシコの原生地を調査しています。移植の候補地はアフリカのタンザニアです。現地の研究者との共同プロジェクトを立ち上げる予定です。



写真 ドームの中に乾燥地と同じ環境をつくり、ジャトロファを栽培。更に環境を変え、育ち方の違いを観察・実験している

## 乾燥地に暮らす人々の役に立つ研究をしたい

私は子どもの頃から環境問題に興味がありました。小学生だった1970年頃、公害の本を親に買ってもらった記憶があります。イタイ

イタイ病などの四大公害を始め、経済成長に伴う負の側面が出てきて、環境庁が設立されたころでした。

乾燥地の研究を志したのは、大学時代に『砂漠化する地球』を読んだのがきっかけです。そのため、大学3年生で専攻を選ぶ際、私は砂漠化の研究ができる可能性のある造園学の研究室を選びました。しかし実際には、当時は砂漠化を専門的に学ぶことは出来ませんでした。

結局、乾燥地研究を始めたのは、博士課程を終えて就職してからです。研究者としては遅いスタートでしたが、夢をあきらめきれなかったのです。鳥取大乾燥地研究センターの教員となったのも、乾燥地についてより専門的に研究するためです。乾燥地研究センターは、古くは砂丘地の農業利用をテーマとした研究機関で

したが、今は世界有数の乾燥地研究機関となっています。研究者の層が厚く、研究施設も整っています。海外に行く機会も増え、世界各地の乾燥地を訪れて、研究を進めています。砂丘がある鳥取という地でなければ、世界へ最先端の研究を発信できなかったでしょう。

これまで私は、人工衛星を使った環境の監視や分析などを専門としていました。しかし、乾燥地での現状を目の当たりにし、「より人の役に立つ仕事をしたい」という気持ちが強くなってきました。基礎研究はもちろん続けますが、自身の研究がどのように社会に結び付いているのかを見たいのです。乾燥地に暮らす人々の生活が、目に見えて良くなるような成果を出せる研究をしたいと思っています。

### 高校生に伝えたいこと

## 自分の夢を 実現できる 大学選択を勧めたい

今、私は、中国の黄土高原やモンゴルなどアジアでのプロジェクトに多くかかわり、また、中南米やアフリカの研究機関と共同研究を進めて

います。そのため、研究室には留学生が多く、授業はすべて英語で行っています。私は「高校時代にもっと英語を勉強しておけばよかった」と思っています。ぜひ、高校時代には語学の習得に力を入れて欲しいです。鳥取大には、自分が本当に学びたいことを考え、「乾燥地の問題に取り組む」などの強い目的意識を持った優秀な学生が入ってきます。卒業生の中には、公的機関やNGOの一員としてアフガニスタンなどで汗を流している人がいます。学生の海外派遣にも力を入れ、そうした人材を育てることに熱心な、面白い大学だと感じています。

もし今、「やりたい」と思うことがあるのなら、自分の夢を実現できる大学を選んで欲しいと思います。もちろん、やりたいことがまだ分からないという高校生も多いでしょう。そういう人は、本を読んだり、新聞を読んだり、映画を見たりしてみてください。あるいはテレビからでも構いません。できるだけ関心を広げ、自分が何をしたいのかを見つけた上で、自分に合った大学を探して欲しいと思います。

### 用語解説

① 乾燥地  
乾燥の程度によって「極乾燥地」「乾燥地」「半乾燥地」「乾性半湿润地」の四つに分けられる。乾燥の程度は降水量と、地面からの蒸発や植物からの蒸散の比で決められる。

### ② ジャトロファ

学名は *Jatropha curcas*。生物学名はナンヨウアブラギリ。ヤトロファ、タイワンアブラギリとも呼ばれるトウダイグサ科の落葉低木。原産地は中南米。種子は有毒だが油分が多く含まれ、バイオディーゼル燃料に利用できる。

### ③ 「砂漠化する地球」

清水正元著、講談社ブルーバックス。

### ④ 国際乾燥地農業研究センター

日本、アメリカ、イギリスなど47か国と、世界銀行などの17の機関が参加する「国際農業研究協議グループ」傘下の15研究機関の一つ。乾燥地研究の分野では世界的に知られている。

# 汚れた都市下水の灌漑への利用法を追究



佐藤敏雄さん  
Sato Toshio

鳥取大大学院農学研究科土壌学分野修士課程2年  
(神奈川県立舞岡高校卒業)

**Q** なぜこの分野に進んだのですか

**A** 高校2年生の冬ごろ、アルバイト先での雑談の中で、先輩から「海外の砂漠で植林活動をしている日本人がいる」という話を聞きました。その話にロマンを感じたのが乾燥地に興味を持ったきっかけです。砂漠化について調べ始めたところ、日本では鳥取大が乾燥地研究に強いことを知りました。

当時、出身高校の卒業生の進路は、大学、専門学校、就職がそれぞれ3

分の1ずつ。また、私は高1からアルバイトをしていて、学習時間は決して十分とは言えませんでした。それでも、鳥取大農学部を目標にして、高3の4月から一気に勉強しました。高1の内容を復習し直すことから始めましたが、目標があったからこそ頑張れたのだと思います。

**Q** 現在の研究内容を教えてください

**A** 私は恒川先生の研究室に籍を置いていませんが、グローバルCOE拠点と一緒に研究を進めています。その中でも、土壌学を専門としています。2年生の時に行ったメキシコで、土壌の大切さを痛感したことがきっかけとなりました。

2008年12月から10か月間、若手研究者を海外に派遣する制度を利用し、シリア第二の都市アレppoにある「国際乾燥地農業研究センター」で研究に取り組みしました。乾燥地で人口が増加すると水が足りなくなり、生活排水や工業排水といった都市下水を灌漑用に使わざるを得なくなります。しかし、多くの発展途上国には、日本のような設備の整った下水処理場がありません。カ

ドミウムや銅、ニッケル、亜鉛などの重金属が含まれたままの水をそのまま使っているのです。

私は、40〜50年間もそうした水を使い続けている地域の30キロ圏内を対象として調べました。水には汚臭と濁りがあるため、地元の人たちも危険な水を使っているという認識があります。それでもその水を使って収穫量を上げた方が収入を多く得られるため、自分が病気になるつもりでも薬を買って治した方が安くつくと考えています。

そこで、長期利用によってどのような害があるのか、それを防ぐにはどうしたらいいのかを研究しました。例えば、土壌サンプルを採取し、重金属などを測定しました。

問題解決の方法には、植物の特性の違いを利用して、重金属を吸いにくい植物を植える方法が考えられます。もしくは、水は農地に均等に広がるわけではないため、汚染された場所の農作物は食用以外に、汚染されていない場所の農作物は食用

にと使い分ける方法も考えられます。

同じような問題を抱えている乾燥地は、世界中にたくさんあります。将来の目標は、現地の人々と直接かわるような研究をすることです。研究で人の役に立ちたいという気持ちもあります。現場で汗を流す仕事に関心が高いからです。

**Q** 高校生へのメッセージをお願いします

**A** 「百聞は一見に如かず」といいますが、私の先生が言っていたのは「百見は一触に如かず」。百回見ても、一度触ってみなければどういうものか分かりません。自分が興味を持ったことには、まず挑戦することが大事だと思います。

## 大学院での佐藤さんの1日

9:00	<b>授業</b> 空き時間には、午後の限られた時間内に実験をスムーズに行うために文献を読み、計画を立てる
12:00	<b>昼食</b>
13:00	<b>実験開始</b> 自分の研究テーマについて、実験を行う。基本的に実験は1人で取り組む
18:00	<b>片付け</b> 実験を終え、器具などを片付ける
21:00	<b>データ整理</b> 帰宅後、実験データをまとめる
24:00	<b>就寝</b>

# 生徒と共に走りながら 受験を肯定的にとらえる 主体的な姿勢を育てたい

徳島県立鳴門高校教諭

喜枝秀行

Kishi Hideyuki

生徒を社会に送り出すために、「受験勉強や学校行事を通して、自ら考え、挑戦できるような姿勢を育てる」ことが目標という喜枝秀行先生。強引な側面があると自己分析し、どのような時も生徒を受け止め、意欲を高められる懐の深さを持つようになりたいと話す。

かつての私

「過去最高のクラス」が  
指導の在り方を見直す契機に

教職歴は16年ですが、そのうち徳島県埋蔵文化財センターに3年間勤務し、前任校で人権教育主事を4年間務めたため、長らく担任業務から離れていました。しかし、この7年の経験は、教師としての大きな糧となっています。特に人権教育主事時代には、さまざまな課題を抱える生徒と出会い、教師が一方的に思いを伝えるのではなく、生徒が話せるようになるまで待つことが大切だと学びました。また、担当する日本史の指導でも転機があ

りました。日本史は暗記科目と思われていますが、私はアウトプットを重視した指導をしています。その理由は、前任校での経験にあります。その年、「これまでで最高の仕上がりと自負したクラスがありました。のみ込みが早く、教えたことはどんどん吸収し、マーク型の模試では平均正答率7割以上という生徒たちでした。ところが、自信满满で臨んだセンター試験本番では、80点台1人、70点台2人……という惨たんたる結果で、模試よりも平均点が10点ほど下がったのです。「盆や正月まで補習をしてくれたのに、期待に沿わずにすみません」と謝ってきた生徒の顔を、私は正視できませんでした。謝らなければな



きし・ひでゆき

教職歴16年。徳島県立鳴門高校に赴任して4年目。担当科目は日本史。3学年担任。学力向上委員会の責任者も務める。徳島県埋蔵文化財センターに3年勤務、前任校では人権教育主事も務める。

徳島県立鳴門高校プロフィール◎1909（明治42）年開校の徳島県立撫養中学校が前身。「鳴高ビジョン2009」において5年後、10年後の中長期計画を立て、進学実績の向上を目指す。◎教員数：74人 ◎1学年生徒数：約310人 ◎2009年度入試合格実績（現浪計）：国公立大は、神戸大、岡山大、広島大、山口大、徳島大などに計53人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志大、立命館大、龍谷大、関西大などに延べ202人が合格。

らないのは自分の方です。問題数にして約3問解けなかっただけなのですが、生徒にとっても、私にとっても、大きな3問でした。

生徒たちは一生懸命勉強し、私も成果を感じていたのに、なぜ本番で実力を発揮できなかったのか……。私は、問題と生徒たちの自己採点結果を何度も見直しました。そこで気付いたのは、自分は教え込むだけで、知識を  
使う方法を伝えていなかったということです。

どうしたら、どんな問題でも正確に解答できるようになるのか。定期考査や模試など生徒の解答用紙を分析すると、惜しい解答がよく見られました。答えがのど元まで出掛かっているけれども出てこなかったり、アバウトな理解で満足しているという生徒の様子が見て取れたのです。せっかく覚えても、きちんと理解しなければ得点にはならない。思い出せない状態を放っておかずに、正確にアウ

トプット出来る状態にまで指導すべきだと気付いたのです。

## 現在の私

### 学校のすべての活動を通じて 挑戦する心を育みたい

私の今の目標は、受験を肯定的にとらえ、つらい道でも挑戦する生徒を育てることです。最近、多くの生徒や保護者は、「楽な道」「安全な道」を選ぼうとします。しかし、受験に全力で挑むことが人間的な成長につながるのだと伝え、「受かる大学でよい」と考える生徒の意識を変えたいと思っています。

挑戦する意欲につなげる工夫の一つとして、教科指導では教え込むのではなく、知識の使い方を伝えるようにしています。例えば、授業はインプット中心、補習はアウトプット中心と位置付けています。補習の初回では「ここで教えるのは、問題を正確に解くための『勉強の仕方』です」と話します。補習を通じて、授業への臨み方や教材の使い方、家庭学習の進め方などを見直させています。補習は生徒が主役の演習です。生徒を指名して答えさせ、解答の理由を聞きながら進めています。時折、問題の中に見える出題者の意図、仕掛けられた罠、必要な知識などを補足しながら解説しています。時間がかかることもありませんが、アウトプットを普段から積み重ねる価値はあ

ると思います。確実に解けたという感動が、次も頑張ろうという意欲に結びつくからです。

生徒の意欲を引き出すことは、学級づくりでも重視しています。2009年度は、3年生の担任をしています。大学進学を目指す学級で、2年生から持ち上がりました。目的意識を持つ重要性を、ホームルームや学年集会で話したり、学校行事などで体験させたりしながら、生徒に実感させるようにしています。

しかし、実際には仕掛けが機能せず、反省することも多いです。先日、外部の講演会で聞いて感動した話を学年集会で話したところ、生徒はぼかんとしているだけで、全く響いていない様子が見て取れました。自身で咀嚼せずに話したために、生徒の心に響いていなかったのです。タイミングと、生徒の状況に合った内容を選ぶことが大切だとつくづく感じますが、なかなかうまくいきません。

学級対抗の体育祭では、クラス全員が参加しながらも勝てるように、生徒と一緒に作戦を練り、練習を積み重ねました。体力は他学級より明らかに劣っていましたが、戦略が当たり、学年で2位となりました。体育祭後の学活では、生徒をたたえ、「受験もこの体育祭と同じだ」と話しました。総合的な能力が劣っていても、得意分野を生かし、チームで力を合わせて計画通りに練習を積み重ねれば、目標は達成できる。この経験は生徒の自信と

なり、学習意欲へと結び付けることができました。生徒が意欲を持って受験に臨み、今後の進路を切り開いていけるよう、学校のすべての活動を利用したいと思っています。どのようなタイミングでどのような仕掛けをすることが有効なのかを模索しているところです。生徒と共に走りながら、目標に向かう意欲を高め、何事にも主体的に取り組める姿勢を育むことが、私の今の目標です。

## これからの私

### 「組織」ではなく「チーム」をつくれる ような懐の深さを持ちたい

私が新米教師だった頃、最もお世話になったのは、40代前後の先輩方でした。その年齢に差し掛かった今、先輩方のように、若手の先生方に接することができているだろうかと自問しています。私は猪突猛進型で、声を掛けて引っ張っていくことは得意なのですが、立ち止まって周りを見渡し、人の気持ちに思いを巡らせるということがまだまだ出来ていません。学校も、学級と同じようにチームで頑張ることが大切だと思います。「組織」ではなく、心の通じ合った「チーム」をつくることは、強引さだけではできません。生徒や周りの先生の言葉にしっかりと耳を傾け、思いを受け止められるような懐の深さを持つてるようになりたいと思っています。

## 座談会

# 「高大接続テスト」は 教育改革の突破口

大学生の学力保証と高校での指導改善などに活用するための「高大接続テスト」（仮称）に関する議論が進んでいる。文部科学省委託調査「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する調査研究」の代表を務める北海道大佐々木隆生教授と4人の高校教師に、「高大接続テスト」に求められる役割、可能性について議論していただいた。

## 「高大接続テスト」概要

2008年12月の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」を受け、「高大接続テスト」（仮称）以下略に関する研究の必要性から、「高等学校段階の学力を客観的に把握・活用できる新たな仕組みに関する調査研究」（以下、「高大接続の協議・研究」）がスタートした。

9月末時点までの検討の経緯などを、北海道大・佐々木隆生教授に説明してもらった。

### ■背景

近年、高校生・大学生の基礎学力が不足し、高大接続機能が低下している。その理由として挙げられるのは、①「大学ユニバーサル化」（注1）時代を迎え、一部の大学を除き大学入試の選抜機能が低下。②高校の教育課程の弾力化による未履修科目の増加。③受験競争の緩和や非学力入試の拡大による高校生の学習意欲の低下の三つだ。

これらの問題を解決する一つの手段として、高校と大学関係者から提案されたのが「高大接続テスト」である。

## 「高大接続テスト」の目的

大学入試センター試験のような選抜目的で実施されている集団準拠型の試験とは異なり、目標準拠型（注2）の達成度を測るテストを想定している。高大接続を円滑にするために、高校段階での学習の達成度を測る性格を持つものとして考えられている。

### ■研究メンバー

国立大学協会4人、公立大学協会1人、日本私立大学連盟2人、私立大学協会2人、全国高等学校長協会長はじめ高校長5人、全国高等学校PTA連合会1人、都道府県教育長協議会1人、中等教育研究者2人、大学入試センター12人、有識者2人の22人から構成されている。

### ■これまでの経過と今後の予定

「高大接続テスト」の基本的な性格と今後検討すべき基本的方向を確認、関係団体の研究報告に基づいた研究、「内外調査」を実施し、10年秋に文部科学省に対して報告予定。テスト実施の有無、実施時期、受験対象は、9月末時点では未定。

注1 M・トロウが提唱。大学進学率が同一年齢層の50%を超えた段階を指す

注2 学習内容毎に評価規準を定め、その規準に対する達成度を評価



## 学習意欲を高めるために 年数回実施も視野に

「大学全入」や推薦・AO入試の拡大を背景に、一部の大学では学生の学力の低下が問題になっています。そんな中、「高大接続テスト」に、高校生の学力、学習意欲を高める機能が期待されています。この点について、高校現場のお考えをお聞かせください。

**植松** 推薦入試やAO入試など、学力試験を課さない入試を受験する生徒は、基礎学力が不足しがちです。早期に合格が決まってしまいうので、その後の学習のモチベーションも下がってしまう。自律的な受験勉強を経験していないので、受け身の学習態度から脱却できず、大学で求められる主体的な学びにつながらないのではという心配もあります。こういった生徒にとって、「高大接続テスト」は学習の動機付けとして有用でしょう。

ただ、テストの実施時期は重要な問題です。3年生の夏頃だと、7月ぐらいまで部活動をしている生徒は十分な勉強時間を確保する

のが難しい。また、公務員試験や専門学校を受験する生徒は、各種試験の実施が8月末から9月頃になりますので、複数の試験の対策が重なってしまう。3年秋以降のできるだけ遅い時期がよいのではないのでしょうか。いずれにしても新テストの導入は、学校行事に大幅な変更を強いるので、慎重に検討してほしいところです。

**吉田** 本校のように、進学から就職まで、生徒の希望進路が多様な学校では、生徒の学力保証のために学習到達度を測る校内検定試験を実施しているところがあります。検定試験は、生徒にとっては目標に、教師にとっては指導指針になり、うまく機能しているケースが多いようで、本校でも導入を検討中です。「高大接続テスト」も、この校内検定試験のように、生徒・教師双方に「このレベルまで」という到達度を示す試験になるとよいのではないのでしょうか。

ただし、センター試験のように受験機会が年1回だと、失敗するとまた翌年まで待たなければなりません。1年に数回受験できる試

験であれば、生徒の意欲も維持しやすいのではないのでしょうか。

**佐々木** 「高大接続テスト」を導入した場合、「高校3年生のある段階に1度実施」と想定している方が多いようですが、高大接続の協議・研究ではそうとは限らないと考えられています。実施時期や回数はテストの性格に関係します。「高大接続テスト」は、生徒の学習到達度の確認を目的とした目標標準型の試験であり、研究会でも、「高校の学習指導の目安に使えるようなものになりたい」という声が上がっています。今、先生方がおっしゃったように年数回受けられるものがよいという意見も出ています。

例えば、中学校での学習を含めた高校1年目の学習成果については、1年生の終わりから2年生の初めに到達度を確認する試験を実施し、2年次、3年次でも順次、学習到達度を確認する試験を行うというのも1つの案でしょう。

——実施科目について、高校の先生方のご意見をお聞かせください。

**寺島** 高校生や大学生の基礎学力低下の原因の1つに、大学入試で

の入試科目数の削減と、高校教育における大幅な科目選択制があるとは考えています。ですから、「高大接続テスト」を動機付けとして生徒に学習させるのなら、5教科

## 参加者



北海道大  
公共政策大学院教授  
**佐々木隆生**  
Sasaki Takao



東京都立西高校  
**寺島 求**  
Terashima motomu  
総務主任、数学科担当



三重県立津高校  
**鈴木達哉**  
Suzuki Tatsuya  
2学年担任（進路指導担当）、  
国語科担当



長崎県立長崎東高校  
**植松信行**  
Nematsu Nobuyuki  
進路指導主事、物理科担当



熊本県立阿蘇高校  
**吉田祐一**  
Yoshida Yuichi  
進路指導主事、英語科担当

7科目で実施した方がよいと思っています。ただ、これは普通科に限った話であり、専門高校を含めた教育課程の違いを考えると、国語・数学・英語に絞らざるを得ないという気もしますが、佐々木先生はどうお考えでしょうか。

私自身は、実施科目は、高校で指導している教科・科目に限定しなくてもよいのではと考えています。例えば、教養に関する科目や、現代社会の諸問題について考えさせる科目などを設定し、高校生として必要な知識、教養を問う試験を実施する。教科の枠を超えた横断的な問題を出題してもよいのではないのでしょうか。

**佐々木** 科目数の多い試験と少ない試験と両方を用意するなど、複数のタイプのテストを作ることも考えられるかもしれませんが。また、教科・科目に縛られない教養的、総合的な問題として出すというのも、実現は容易なことではないにしても、確かに一案ですね。ただ、そうした時も、高校での学習の基礎基本につながるような国語系の問題、理数系の問題を必ず入れた

いところですか。いずれにしても今は、いろいろな可能性が考えられると思います。

——では、どのような生徒を対象にした試験となるべきでしょうか。

**吉田** 推薦・AO入試を受ける生徒に加え、校内検定試験的な機能を持つテストであれ、中位層・下位層の生徒の学習意欲を高めるために大きな役割を果たすと思います。ただ私は、東京大などの難関大を目指す生徒も受験するようなテストにしてもらいたい。現在、大学の学問は学際的な色彩が強く、幅広い領域を研究する視点が必要です。上位層の生徒でも、高校で学んだ基礎学力が横断的に身に付いているかの確認が求められます。

**佐々木** 私は、「高大接続テスト」が1種類の試験である必要はないと思います。例えば、アメリカではSATやACT（注1）などの共通試験を大学入試に利用するのが一般的です。大学はほかの学力試験を課さずにこれらを選抜に利用しています。SATにはいくつ種類があります。「高大接続テスト」にも難易度別に数種類あつて

もよいのかもしれませんが。

**寺島** 一方で、上位層の大学の選抜には大学入試センター試験が十分機能しているのも事実。現状の大学入試の制度を維持しながら、「高大接続テスト」をどのように機能させていくか、高校現場はより明確な指針を必要とするでしょう。

**吉田** 選抜にセンター試験を採用する大学、「高大接続テスト」を採用する大学、その両方を併用させる大学と、分かれていくことも考えられますね。

**佐々木** その通りです。ただ、その時に問題になるのは、コストです。仮に、高大接続テストを大学入試センター試験のような全国一斉テストとして実施すると、コストも労力もかなり非常に大変です。まだ調査段階ですが、医学系の共用試験は参考になるかもしれません。医学部・歯学部の学生は、臨床実習の前にCBTによる学力試験を受験します。CBTは、コンピュータで出題・解答する試験で、問題は各大学から募集、精査され、プールしていきます。センター試験のように全国一斉に同じ



試験問題を解くのではなく、膨大な問題の中から、コンピュータが受験生一人ひとりに違う問題を出題するのです。この方法だと、初期投資はかかりますが、実際の運用段階では人手もコストもかなり抑えられるでしょう。全国一斉ではないので、高校の情報処理室などでも実施できます。

大学側が個性に合わせた入試方式を導入すべき

——「高大接続テスト」が大学で

注1 SAT(Scholastic Assessment Testの略)とACT(The American College Testing Programの略)は、アメリカの多くの大学入試で使用されている大学共通テストのこと



どのように活用されるのか、現時点で高校の先生方が疑問に感じていることはどのようなことでしょうか。

**鈴木** 高校教師は40人生徒がいれば40人すべてを成長させたいと考えますが、研究大学は別としても、「教育」の部分で高校と同じ発想で生徒を育てていく覚悟がなければ、大学は存続できないと思います。

一方で、現状では一部の大学は学力が低くても合格出来てしまう。「高大接続テスト」が実現されれば、そういう生徒は排除されてしまうかもしれない。学力不足の生徒で

も入学させなければ存続できない大学は淘汰されても仕方がない、ということが合意できるかが大きな課題だと思います。

**佐々木** 大学も、ジェネラリストの育成よりも、資格取得を支援したり、専門職業人の育成を重視するところが増えていきます。高校卒業資格さえあれば入学できるアメリカのコミュニティ・カレッジのようなやり方もあるでしょう。

各大学がどのような学生を育てていきたいかを、これまで以上に明確に意思表示する必要がありますよね。国際的な教育研究拠点を目指す大学、単科大学で大学院教育に重点を置く大学、一般教養の修得に重点を置く大学……そうした大学の機能分化に合わせて、試験も運用していくべきでしょう。

### 教育課程を含めた 教育改革の一環

——高校と大学の接続、そして教育改革という観点でとらえた場合、今後どのような点が、「高大接続テスト」のポイントになりますか。

**鈴木** 「高大接続テスト」が、非学力試験で合格した生徒の学力担保を目的とするためだけのものなら、「本校には関係ない」と思う教師も多いでしょう。しかし、今日お話をうかがって、一部の生徒の学力保証だけでなく、高校の教育課程をも大きく変動していく、教育改革の突破口になる可能性があると思いました。

**佐々木** 「高大接続テスト」が導入されてまず活用されるのは、やはり推薦・AO入試でしょう。しかし、おっしゃる通りそれは突破口にすぎず、これだけで高校生・大学生の学力向上に結び付くわけではありません。「高大接続テスト」は、真の高大接続と教育改革の一環だととらえる必要があるでしょう。

**寺島** 「高大接続テスト」が何を指しているのか、明確な言葉で打ち出すことが必要でしょうね。大学の機能分化が進んでいる以上、入試の形もみんな同じというわけにはいかないはずですから。

**鈴木** そう思います。ただ、センター試験と「高大接続テスト」が併用されれば、生徒の負担が増える

るのは事実です。その時に、「高大接続テスト」は授業をきちんと受けていたら、特別な対策は不要であることをはっきりと打ち出すことが必要だと思います。そして、高校のみならず小・中・高・大で身に付けるべき学力を明確にし、共有化することが、高大接続も含めた教育改革の第一歩になるのではないのでしょうか。

**吉田** テストは、強烈な発信力を持ったメッセージです。こういう問題ならばこういう学習をしなくてはならないと、教師も生徒も実感できるものであってほしいですね。

**植松** 大学へ進学する生徒の学習の姿勢が受け身になっていて感じています。生徒が主体的に、自ら考えながら学んでいくような教育環境の実現を、みんな考えていく契機になればよいと思います。

**佐々木** 高大接続を含めた教育改革の実現は、大学や高校がそれぞれ主張するだけでは不可能です。今日のように、高大関係者が考えを述べ合い、力を合わせて取り組むことが必要ですね。

——ありがとうございました。

**教師に負担がかかりすぎない、学校と保護者の連携法を模索する**

いかに保護者と学校が連携するかは、これからの学校づくり、学校経営にとってとても重要なことだ。本校でも、学校全体の大規模な保護者会から、小規模な取り組みまで多岐にわたりに実施している。問題は、保護者の都合を考慮して休日や平日夜の開催が大半であること。保護者には好評だが、教師の負担とその代償については検討が必要だと思う。〔山形県・匿名希望〕

**生徒の未来を共に考え、保護者との信頼関係を築く**

10月号の特集を読み、学年主任の時、保護者の意識改革を推進したことを思い出した。生徒の意識を変えるためには、保護者の意識改革も進める必要がある。私は一日一軒、家庭訪問をし、話して回った。いつの間にか、保護者が私の支援者となり、生徒の意識も変わった。共に子どもの人生を考えていくことと、進路指導、教科指導、生徒指導すべての視点を持ち、保護者と生徒に当たることによって信頼が生まれるのだと思う。〔福岡県立青豊高校・上森哲生〕

**八幡高校を参考に、先を見越した指導を実現**

毎回、模試の結果を分析するたびに、生徒の弱点補強の必要性を痛感し、各教科の先生方に対策を講じてもらっている。しかし、それは、後手後手の対応にすぎないと反省していた。10月号「指導変革の軌跡」の福岡県立八幡高校の事例を参考に、「日々の日課」「口頭試問」などを行い、先を見越した指導を実践していきたいと思う。〔秋田県立秋田中央高校・皆方紀夫〕

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 5

教育最前線からのホットな話題を紹介します

**30代の情熱と中堅の手綱さばきが学校を動かす**

「30代教師の情熱」を読んで感じるのは、30代は教師として中堅の仲間入りの時期だということ。その時までにはどのような教師生活を送ってきたかで、その後の教師人生は大きく変わる。初任当初の情熱が色あせ始めるのも30代だ。若さを前面に押し出し、突っ走って欲しい。それが、硬直した、あるいは惰性に流れやすい組織を変革する切り札になると思う。若手の先生方の情熱と中堅の先生方の手綱さばきがみ合って、教育現場が更に活性化することを切望している。〔奈良県・育英西中学校高校・久保貴芳〕

**研究の目指す世界観の提示を求める**

「未来をつくる大学の研究室」では、今後、その研究が目指す世界を示して欲しい。研究に懸命な姿勢は理解できるし、読んでいて興味もそえられる。しかし、その先の目指すところに夢がないと、生徒は「就職に有利」といったレベルでとどまってしまう危険性がある。抽象的だが、その研究が目指す世界観を見せて欲しいと思う。〔福島県・匿名希望〕

教師川柳

若手組 年寄り組より 元氣なし

新潟県・匿名希望

「VIEW21」へのご意見・ご感想を Benesse教育研究開発センターのウェブサイトからお寄せください

下記の手順でアクセスしてください。

- ① 「Benesse教育研究開発センター」のトップページの「情報誌ライブラリ」の「高校向け」のプルダウンメニューをクリックしてください。
- ② 画面右端の「VIEW 21」の表紙の下にある「読者アンケートにご協力をお願いします」をクリックしてください。
- ③ 入力フォームが表示されますので、ご記入の上、送信してください。

<http://benesse.jp/berd/>



編集後記

「生徒が目指す進路を実現させたい」。先生方が抱く想いです。しかし、たとえ自立して大学に合格できる学力が付いても、家庭の経済的な事情で受験すらできない生徒がいることも事実。そうした学校現場の現実を私たち編集部が理解していなければ、先生方に役立つ情報発信はできないことを肝に銘じたいと思います。(小泉)

VIEW21 12月号 Vol.5

2009年12月1日発行

発行人 新井健一  
 編集人 原 茂  
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション Benesse教育研究開発センター  
 印刷製本 大日本印刷(株)  
 編集協力 (有)ペンダコ  
 執筆協力 中丸満  
 撮影協力 荒川潤、川上一生、谷口哲、ヤマグチイッキ

VIEW21

2010  
February  
2月  
Volume 6

次号は  
2月8日発行(予定)  
「VIEW21」高校版は  
年6回の発行です

VIEW21編集部  
 〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オハラシティタワー22階  
 電話 03-5371-1238  
 ©Benesse Corporation 2009